

Kyoto

International

Festival

of

Contemporary

Culture

PARASOPHIA

PARASOPHIA
CHRONICLE

02

KOKI TANAKA
& MIKA KURAYA

目次

table of contents

p. 1 ▶ オープンリサーチプログラム02
河本信治

p. 1 ▶ 抽象的に話すこと——ヴェネツィア・ビエンナーレに参加して
田中功起+蔵屋美香

p. 18 ▶ Open Research Program 02
Shinji Kohmoto

p. 19 ▶ abstract speaking—participating in the Venice Biennale [abridged]
Koki Tanaka & Mika Kuraya

p. 25 ▶ 奥付

p. 26 ▶ Publication data

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015 オープンリサーチプログラム02[報告会]田中功起+蔵屋美香「抽象的に話すこと——ヴェネツィア・ビエンナーレに参加して」

日時: 2013年7月27日(土) 19:00-20:30

会場: 同志社大学今出川キャンパス 良心館地下2番教室

主催: 京都国際現代芸術祭組織委員会、一般社団法人京都経済同友会、京都府、京都市

後援: 国際交流基金

写真撮影: 西浦綾桂、光川貴浩

運営協力: 大石祥子、川西美里、古俣皓隆、清水明日香、角千波、蓮田真優美、安田七海、山本育恵、尹志慧、好光義也

謝辞: 越前俊也

www.parasophia.jp/events/a/koki-tanaka-mika-kuraya

Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015 Open Research Program 02 [Report] Koki Tanaka & Mika Kuraya “abstract speaking—participating in the Venice Biennale”

Date: Saturday, July 27, 2013 7:00-8:30PM

Venue: Doshisha University Imadegawa Campus (Ryoshinkan B1F Room 2), Kyoto

Presented by the Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee, Kyoto Association of Corporate Executives (Kyoto Keizai Doyukai), Kyoto Prefecture, and Kyoto City

Under the auspices of The Japan Foundation

Photography: Takahiro Mitsukawa, Ayaka Nishiura

Event assistants: Ren Hasuda, Misato Kawanishi, Hiroataka Komata, Shoko Oishi, Asuka Shimizu, Chinami Sumi, Ikue Yamamoto, Nanami Yasuda, Yoshiya Yoshimitsu, Jihye Yun

Special thanks to Toshiya Echizen

www.parasophia.jp/events/en/a/koki-tanaka-mika-kuraya

河本 ▶ 京都国際現代芸術祭2015のアーティストディレクターをやっております河本と申します。今日は多くの方々にお集まりいただき、本当にありがとうございます。オープンリサーチプログラムは、私たち事務局が2015年に向けて、いろいろ調査し学習していくプロセスの一部をみなさんと共有し、一緒に体験し学んでいくことを目的としています。2回目の今回は、**今年のヴェネツィア・ビエンナーレの日本館**の代表でありますアーティストの**田中功起**さん、キュレーターの**蔵屋美香**さん、この二人を迎えることができました。言うまでもなくヴェネツィア・ビエンナーレは、世界各地で開催されているビエンナーレやトリエンナーレなど、数多くある国際展の原型であるといえます。そしてスケールも、たぶんカッセル・ドクメンタと匹敵するくらいの巨大な規模で開催されます。今回はお二人にヴェネツィア・ビエンナーレの報告をしていただくとともに、国際展とはどういうものか、そして、これに選ばれた作家とキュレーターが準備のプロセスで何を考え、直面した問題をどう解決していったかということについても、是非お話をお伺いしたいと思っています。

抽象的に話すこと—— ヴェネツィア・ビエンナーレに参加して 田中功起+蔵屋美香



ヴェネツィア・ビエンナーレについて

田中 ▶ ヴェネツィア・ビエンナーレに関するトークは**東京ではよくやっている**のですが、プロセスの部分の話は実はあまりしていません。本日はコンペの辺りから詳しいお話をしたいと思っています。

蔵屋 ▶ 最初に全体の仕組みだけ、前提として簡単にご説明します。**ヴェネツィア・ビエンナーレ**は近代オリンピックの翌年にできて、120年近い歴史を持っています。途中、ムッソリーニのファシスト政権が今の国別対抗の形をつくって、今年

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015

2015年3月7日から5月10日まで京都市美術館、京都府京都文化博物館ほか京都府、京都市の関連施設等で開催される現代美術の国際展(奥付参照)。

河本信治【こうもと しんじ】

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015アーティストディレクター。元・京国立近代美術館学芸課長。

第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展 日本館

タイトル:「抽象的に話すこと——不確かなもの共有とコレクティブ・アクト」

参加作家: 田中功起(1975年日本生まれ)

キュレーター: 蔵屋美香(1966年日本生まれ/東京国立近代美術館美術課長)

主催: 国際交流基金

会場: 日本館、ジャルディーニ

受賞: 国別パビリオン部門特別表彰

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp

田中功起【たなか こうき】

1975年栃木県生まれ。アーティスト。現在ロサンゼルスを拠点に活動。2008-09年に個展「たとえばここ最近の作品をすこし違ったかたちでみせること」(群馬県立近代美術館)を開催。参加した主なグループ展に「La Cabane」(2006、パレ・ド・トーキョー、パリ)、台北ビエンナーレ2006、第7回光州ビエンナーレ(2008)など多数。ポータルサイト「ART IT」で「往復書簡 質問する」を連載。www.kktnk.com/alter twitter.com/kktnk

蔵屋美香【くらや みか】

1966年千葉県生まれ。東京国立近代美術館美術課長。主な企画展に「旅——ここではないどこかを生きるための10のレッスン」(2003)、「ビデオを待ちながら——映像、60年代から今日へ」(2009、三輪健仁と共同キュレーション)、「寝るひと・立つひと・もたれるひと」(2009)、「いみありげなしみ」(2010)、「路上」(2011)、「ぬぐ絵画——日本のヌード1880-1945」(2011-12)。以上、全て会場は東京国立近代美術館。

田中功起×蔵屋美香「抽象化によって協働の可能性を考える——第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展帰国報告会」(「をちこち」2013年8月)

2013年7月18日 国際交流基金 JFICホール「さくら」での報告会

www.wochikochi.jp/topstory/2013/08/abstract-speaking.php

第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展

(以下「第55回国際美術展」)

会期: 2013年6月1日-11月24日

内覧会: 2013年5月29日-31日

授賞式・開会式: 2013年6月1日

会場: **アルセナーレ**、**ジャルディーニ**、その他ヴェネツィア市内とその周辺

www.labiennale.org/en/art

で55回。現在は、建築展、美術展、建築展、美術展、というふうに1年おきに美術展が行われています。

ヴェネツィア・ビエンナーレの会場は二つあり、一つは**ジャルディーニ**(Giardini)。この中に、セントラル館またはビエンナーレ館と呼ばれているものと、他に日本館、アメリカ館、ドイツ館、ベルギー館、スイス館、フランス館のように、**各国のパビリオン**とが点在しています。もう一つが**アルセナーレ**(Arsenale)と言って、かつて非常に強い海軍を持っていたヴェネツィア共和国が軍艦や大きな商船を造っていた跡の、巨大なレンガ造りの長い建物。ビエンナーレ館と各国館があるジャルディーニ、それから巨大なアルセナーレ。この二つの会場がメイン会場となっています。

セントラル館とアルセナーレ会場は、毎回任命される総合ディレクターがキュレーションをする場所です。各国館では、私のように各国のキュレーターが好きなアーティストを選んでプレゼンをします。このセントラル館とアルセナーレ会場に関しては、今年の総合ディレクターは**マッシミリアーノ・ジオーニ**(Massimiliano Gioni)という、まだ39歳の若い人でした。その人が「**Il Palazzo Enciclopedico**」、百科全書の宮殿というタイトルをつけて、二つの場所を使ってテーマ展をやったんですね。なので二つの会場の中に、ジオーニがキュレーションする**テーマ展示**があり、各国がそれと別に好きに展示をしているという構造がある。

なおかつジャルディーニとアルセナーレに入りきれない、**コラテラル**(Collateral)と呼ばれる関連企画が島中の建物を借りて行われています。これはたぶん100ヶ所以上あって、私もオープンした後、1週間近くいたんですけど、それでも全てを見て回ることはできませんでした。参加パビリオンは国別で88ヶ国。それにプラスして、コラテラルと、ジオーニがキュレーションした巨大なテーマ展示が二つの建物で行われているというのが、ヴェネツィア・ビエンナーレの全体像です。私たちはその中の、各国館が並んでいるジャルディーニにある、**日本館**と呼ばれる、1956年に建てて今でもそのまま使われている建物で展示をすることになったわけです。

第55回国際美術展 国別パビリオン

88ヶ国が参加

初参加国： アンゴラ、クウェート、コートジボワール、コソボ、ツバル、バーレーン、パハマ、パラグアイ、モルディブ

第55回国際美術展 国際展(企画展)

総合ディレクター： **マッシミリアーノ・ジオーニ**(1973年イタリア生まれ/アソシエイト・ディレクター/企画展担当ディレクター、ニュー・ミュージアム、ニューヨーク)

タイトル：「**エンサイクロペディック・パレス**」

参加作家： 38ヶ国から150名/組以上

第55回国際美術展 コラテラル・イベント(並行イベント)

「国際展のキュレーターの承認を得た、国内外のノンプロフィットの機関による47の並行イベントがヴェネツィア市内の複数の会場で開催されます」(ヴェネツィア・ビエンナーレ)

日本館

設計： 吉阪隆正(1917-1980)

竣工： 1956年

所在地： ヴェネツィア市ジャルディーニ地区内(Padiglione Giapponese Giardini della Biennale, Castello 1260, 30122 Venezia)



コンペについて

田中 ▶ 日本館の代表がどういう形で選ばれていくのかという話を最初にしておきます。**国際交流基金**という外務省の外郭団体があるのですが、そこがまず日本館の展覧会を企画するキュレーター（今まではコミッショナーと言っていました）を選びます。日本人の、いわゆる美術館学芸員をだいたい5~6人——その年によって違いますが——選んで、その学芸員たちがさらに一緒にコンペに臨むアーティストを選ぶ。そしてコンペでは、アーティストがプレゼンテーションするのではなくて、キュレーターが展覧会の企画内容を、その選考委員にプレゼンテーションするんです。

蔵屋 ▶ 田中さんが説明してくれたように、最初にキュレーターの方に「コンペやりませんか？」って声がかかるんですね。——ちょっと訂正すると、別に美術館学芸員である必要はなくて、例えば榎木野衣さんのように大学で評論をされている方がキュレーターに選ばれたりもします。準備期間がだいたい1ヶ月ちょっとしかないので、2012年3月の初めぐらいにいきなり職場に封筒が来て、開けると「コンペやりませんか？」って書いてあって「げー！」と思うんですけど。とりあえず田中さんに連絡をして、二人で1ヶ月ちょっとかけて案をつくって、4月の半ばにその委員に対して、私が二人で練った案をプレゼンするわけです。なぜ私が田中さんに声をかけたのかというと、実は今回のコンペが初めてではなかったんです。前回、東芋さんが日本館の展示をされた2011年第54回展のときも、**コンペ**に声をかけていただいて、田中さんに「やりませんか？」と言って案をつくっていたんです。

そのときは田中さんと、**トレットペーパー**という、世界中どこにでもあるものに対して、普通にお尻を拭くのではない**1,000**の使用方法を考えて、それを**たくさんのビデオ**にして、**ブース**をつくって会場内に並べるという案をつくりました。前回せっかくあそこまで練り上げたんだから、もう一回田中さんと案をつくらうと思って声をかけました。

まず最初に考えたのは、このタイミングで日本が国際美術展に参加するときに、東日本大震災（2011年3月11日）という大災害を経験していて、このことを何らかの形で扱わないということは、ほぼあり得ないだろうということです。でも田中功起というアーティストとやりたいということと、震災を扱いたいということをどうやって結びつけたらいいかのアイデアは声をかけたときには全然なくて、結構悩んだんですね。

田中 ▶ 2010年のコンペのときは、わりと蔵屋さんの中である程度アイデアをばっちり固めて、僕に話が来たんですけど、今回の場合はとりあえず電話で「どうしますか？ またやりますか？」って話からでした。震災が2011年にあって、**直後のヴェネツィア・ビエンナーレ日本館は東芋さん**がやったんですけど、震災後4ヶ月ぐらいしかなかったのでもれに対応してプランを変えることは難しかったと思います。そういう意味では今回は震災以後に、ヴェネツィアという場でどういうふうに日本のアーティストがその問題に臨むのかが問われる、最初の機会なわけです。僕個人の関心やいままでの活動はひとまず措くとして、震

国際交流基金(ジャパンファウンデーション)

「1972年外務省所管の特殊法人として発足し、2003年10月に独立行政法人となった日本を代表する公的な国際文化交流機関」(国際交流基金)

www.jpf.go.jp

第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展 日本館の指名コンペ (2010年開催)

応募者(当時の肩書き) / 作家・テーマ:

・植松由佳(国立国際美術館主任研究員) / 東芋「超ガラパゴス・シンドローム」(仮)

・大島賛都(サントリーミュージアム(天保山)学芸員) / 木村友紀の個展——桂離宮をテーマとした展示案

・片岡真実(森美術館シニア・キュレーター) / 塩田千春

・蔵屋美香(東京国立近代美術館美術課長) / 田中功起

・光田由里(渋谷区立松濤美術館学芸員) / Bright Matter: high density of vacancy 町田久美+さかざしよしお

・南雄介(国立新美術館学芸課長) / 中村一美 存在の鳥——破籠にて

国際展事業委員会(当時の肩書き): 五十嵐太郎(東北大学教授)、逢坂恵理子(横浜美術館館長)、笠原美智子(東京都写真美術館事業企画課長)、河本信治(京都国立近代美術館特任研究員)、塩田純一(青森県立美術館美術統括監)、本江邦夫(多摩美術大学教授)

田中功起『書かれたものを集める(Collected Writings / A Book)』「04 - 蔵屋美香+田中功起 第54回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館指名コンペ 落選案」

www.kktnk.com/text/p04.html

第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展 日本館

タイトル: 「東芋: 連れこスーパ」

参加作家: 東芋(1975年日本生まれ)

コミッショナー: 植松由佳(国立国際美術館主任研究員)

主催: 国際交流基金

会場: 日本館、ジャルディーニ

www.jpf.go.jp/venezia-biennale

災の問題を扱わないわけにはいかないだろうと。それは僕らが選ばれる、選ばれないに拘らず、考えましょうというふうに、最初の時点でお互いに思っていたんです。

蔵屋 ▶ そうですね、だけど具体的な案がないんです。3月にアーティストの佐々木健さんと一緒に現地を見に行ったりもしたんですけど、「どうすればいいのか」みたいな感じで思考がフリーズしたりもして、でもそこからコンペ案の締切まで2週間ぐらいしかなくて。

とってもいい天気のある日に、目黒のギャラリー（青山 | 目黒）で田中さんと会ったとき、震災後に思いがけない協働作業みたいなものが各地でいっぱい生まれているという話になりました。例えば、広島のお蠣漁師さんが宮城のお蠣漁師さんを助けてるんですね。この二者は、平常時には自分たちが関係あるとは全然思っていなかったんですけど、すごく大きな出来事が起こって「なんかやらなきゃ」と思ったときに、意外なところで繋がっているような、そういう関係が生まれていたのです。こういうことと、田中さんがそのときまでにつくっていた人と人が何か協働作業をやるという作品は、繋がられるのではないかというふうに思い、コンペ案が決定しました。

田中 ▶ 2010年に9人の美容師が1人のモデルの髪の毛を切る協働作業を記録したビデオ（《a haircut by 9 hairdressers at once (second attempt)》2010）をつくっていました。いわゆる「災害ユートピア」のような、ある種のユートピアとして人々が助け合うコミュニティが震災以後に生まれたというニュースをすごくたくさん聞いて、僕の実践がそこに繋がられるんじゃないかと思いました。そんな話もしている中で、全体のインスタレーションについては複数の建築関係の人たちに考えてもらうというアイデアもありました。僕が考えるのではなく、参加者に作品の配置等も含めて考えてもらい、いくつかの避難所に関係する素材、アルミシートや毛布、木材、ダンボールなどを使って空間を区切る、その区切り方も協働作業によって決めてもらうという案でした。

蔵屋 ▶ 田中さんがそのときまでに撮っていた作品は、9人の美容師が協働して、話し合ったりケンカしたりしながら、1人の女の子の髪を切るっていうビデオ。あと震災を挟んで完成した、5人のピアニストが1台のピアノで作曲するというビデオ（《a piano played by 5 pianists at once (first attempt)》2012）でした。コンペのときには、この2点は参考例であって、それを出品するのではなく震災に関連する課題をあるグループの人に新たにやってもらって、それを10〜20本ぐらいのビデオにするという案でした。加えて先ほど田中さんが言ったみたいに、会場のつくり自体も協働作業として建築関係者をヴェネツィアに呼んで、1ヶ月くらいかけてつくってもらおうと考えました。コンペのときに河本さんが審査員の一人としていらしたんです。そしたら河本さんが、「まずこのビデオ2点はとてもおもしろいからちゃんと見せたら」とおっしゃったんですね。もう一つ、「20本くらいビデオをがらがら撮って見せるって言うけど、長くてもいいからじっくり見たいね」と。それは後々すごくヒントになりました。短いものをパッパッパッと見せようと思ったたりもしていたんです。ビ

a haircut by 9 hairdressers at once (second attempt)

2010 HD video 28 min.

Commissioned by Yerba Buena Center for the Arts, San Francisco

Director of photography: Daniel Gorrell

Lighting and camera operator: Andrew Eckmann

Sound: Anthony Ranville

Gaffer: Daron Melkonian

Assistant: Alfredo Solis

Production photography: Tomo Saito

Sound sweetening: Taku Unami

Coordination: Julio Morales, Kim Silva

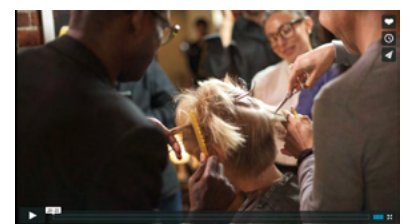
Production: Yerba Buena Center for the Arts

Curator: Julio Cesar Morales

Location: Zindagi Salon, San Francisco

Participants (August 1, 2010): Victor A Camarillo, Kristie Hansen, Nicole Korth, Nikki Mirsaaid, Olga Mybovalova, Sondra Osorio, Anthony Pullen, Brian Vu, Erik Webb, Karen Yee

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_05.html



vimeo.com/kktnk/haircut

エンナーレってわざわざしている場所だし、会場が広大なので、1時間もあるビデオを見てくれるとは思わなかったんです。けれどそういうふうに言われて、震災と関係なく撮ったけれど、何か震災の協働作業を経験をした後なのでそう読み込んでしまう。このことがまずおもしろいなと思って、『ピアノ』と『ヘアカット』を入れた方がいいんじゃないかという話になりました。短くてアイキャッチングなものをたくさん見せるのではなくて、じっくり長いプロセスを見せるやり方でヴェネツィアという場所に作品を展示してみるのもいいんじゃないかなと思いました。コンペのときに河本さんにアドバイスをいただいたことは、最終的にどういう展示にするかに大きく影響したんですよ。

遠回りしながら、震災を考える

田中 ▶ 他のコンペ参加者についても少し話しておいたほうがいいかもしれません。例えば森美術館の片岡真実さんは杉本博司さんと、広島市現代美術館の神谷幸江さんはオノ・ヨーコさんとプランを考えていました。

蔵屋 ▶ 林寿美さんという、DIC川村記念美術館の方が河原温さんでしたね。

田中 ▶ 河原温さんは承諾していなかったようですが、それでもプランを提出したようです。あとは大島賛都さんが川俣正さんだったり。僕と比べたらかなり有名なアーティストたちの名前が候補者にはあったわけですね。何故か審査員の人たちが、今回の日本館は若い人に任せるべきだという意見になったようで、僕と岡村恵子さんが組んだ石田尚志さんが残り、僕らのプランが選ばれました。オフィシャルな発表があった後にTwitterを介して一部の人たちが炎上して、特に当事者性の問題に関して批判が集中しました。あなたはどれだけ被災地に行ったのか、というような。震災の問題を扱うんだとしたら、僕のように日本に住んでいない輩が、その問題を扱っていいのだろうかというような声もあったと思います。

蔵屋 ▶ ちなみに、私はTwitterをやってないし、田中さんの言う「炎上中」は出張で海外にいて、あまり関わらなかったんです。炎上という言い方は非常に強いですけど、議論になったことは間違いなくて、それはとてもいいことだと思っています。議論にはいくつか論点があって、一つにはベテランがせっかくこれだけ挙げたのに、なぜベテランで賞を狙いに行かないんだ、という意見でした。もう一つは当事者性という、田中さんが今言ったとても重要な問題です。例えば、ものすごい苛烈な経験をされたわけですよ。家が流されたり、家族が亡くなったり。そういうものを、その日ロサンゼルスにいた田中さんや、シンガポールにいた私のように、直接的に経験しなかった者が、しかも非常に遠回りなやり方で——つまり被災地に行ってドキュメンタリーを撮るとか、被災地の人たちと一緒にボランティアをやってアートプロジェクトを起ち上げるとかではない形で——なぜ表現できるのか、ということが問題になったんです。

第55回国際美術展 日本館の指名コンペ(2012年開催)

応募者(当時の肩書き) / 作家・テーマ

・大島賛都(元・サントリーミュージアム(天保山)学芸員) / 川俣正

・岡村恵子(東京都写真美術館学芸員) / 石田尚志「反復する部屋 終わらない絵画」

・片岡真実(森美術館シニア・キュレーター) / 杉本博司「プラトンの洞窟」

・神谷幸江(広島市現代美術館学芸担当課長) / Yoko Ono—At Dawn

・蔵屋美香(東京国立近代美術館美術課長) / 田中功起
・林寿美(川村記念美術館主任学芸員) / 河原温(本人は未承諾)

国際展事業委員会(当時の肩書き) : 五十嵐太郎(東北大学大学院教授)、笠原美智子(東京都写真美術館事業企画課長)、河本信治(京都国立近代美術館特任研究員)、塩田純一(新潟市美術館館長)、水沢勉(神奈川県立近代美術館館長)、南高宏(女子美術大学教授)

「第55回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展日本館についてのtweet」(Togetterまとめ)

作成者(ユーザー名) : edtion1

togetter.com/li/303380

田中 ▶ 僕は、この前(批評家の)佐々木敦さんと話したことが少し示唆的だと思ったんです。それは、震災の当事者自身はもう亡くなっている、その実際の当事者からグラデーションでどんどん薄くなって、そのほとんど消えかかった辺りに僕がたぶんいる。言ってみれば、今生きてる全ての人たちは当事者ではなく、真の当事者から距離を置いて、グラデーションになっている、と話してくれました。ある意味「なるほどな」と思ったんですけど。じゃあ当事者でなければ表現をしてはいけないのか、ということについて最初の時点では僕は内心「そうだな」と思ったんです。僕がやるのはおかしいだろうと思ったんですけど、実際にコンペに挙がった案の中で震災を扱ったものは、川俣正さんの案と僕の案だけだったんです。僕は、震災を扱わないのはやっぱりちょっと変だろと思っていました。それが実際の震災から2年経った状態でヴェネツィア・ビエンナーレになるとしても、ある種の時間的な距離も含めて、何かしら言及するというか。その言及の仕方をどういふに捉えたらいいのか、というのが最初のコンペの段階ではあんまりよくわかっていなかったけれど、その疑問がそこで生じたので、じゃあそれをどういふに作品化するかっていうことと、あとは言葉にしていこうかということ、言ってみれば最初の段階で僕はTwitterを介してさまざまな宿題をもらったので、そういう意味ではよかったなと思ってはいたんですけどね。

蔵屋 ▶ 田中さんが佐々木敦さんとの会話からヒントを得たように、私は田中さんと一緒に畠山直哉さんと去年の11月にお話したんです。去年の建築ビエンナーレで伊東豊雄さんと三人の若い建築家がチームを組んで、被災地にみんなが集まれる「みんなの家」を建てるプロジェクトで金獅子賞を取られたんですけど、畠山さんはその展示に加わっていて、日本館の壁の全面に貼る陸前高田のパノラマ写真を撮られていました。畠山さんは陸前高田のご出身で、自分の街が破壊された様子を非常に冷静に撮って、それをパノラマで四面に貼らされていたわけです。畠山さんとお食事をさせてもらったときに、距離のことを言っていたんです。陸前高田というと被災地の真ん中でストレートな当事者だと思ってしまうけれど、でも例えば「みんなの家」を建てる杉を持って来たときに「あそこの地域に建てるくせに、俺の集落から持って行った杉を使うんだってな」みたいな言われ方をするそうです。つまり、陸前高田の中でも細かい区分があって、どこが一番濃い当事者かということは、陸前高田なんていう塊で語るができない。同じ地域の中でも経験は全く異なっているので、結局誰が一番濃い当事者かということは決めることができない。むしろ、例えば亡くなった方がいるとしたら、そこからちょっとずついろんな違う経験をした人たちが、全員自分自身の経験を持って集まっているという当事者性について考える感じです。あと畠山さんはもう一つ、「芸術っていうのは遠回りなとこに値打ちがあるんだろ」と仰ってくれました。畠山さんのように、実際に陸前高田ご出身の方が、ストレートに語るのではなくて、アートじゃないと語れない、遠回りなやり方というものをちゃんと考えると言ってくれたことは、いつでも励みになっていたんです。

田中 ▶ そのときに抽象的に捉えるべきじゃないかみたいなことも言っていましたよね。

ART iT + CNAC LAB共催シンポジウム

田中功起 × 佐々木敦 新刊 田中功起『質問する その1 (2009-2013)』発行記念トーク

2013年7月17日(水) 19:00-21:00

CNAC LAB(東京都港区南青山5-4-30)

www.cnac.jp/lab/symposium/detail.php?entry_id=0000000056

第13回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展 日本館

タイトル:「ここに、建築は、可能か」

参加作家: 乾久美子(建築家)、藤本壮介(建築家)、平田晃久(建築家)、畠山直哉(写真家)

コミッショナー: 伊東豊雄(建築家)

主催: 国際交流基金

会場: 日本館、ジャルディーニ

受賞: 国別パビリオン部門 金獅子賞

www.jpif.go.jp/venezia-biennale

蔵屋 ▶ そうですね。今回の展示のタイトルは「抽象的に語ること」というタイトルです。これから作品映像をお見せしますが、まさに普通に見ると「どこが震災なの？」ってわからない。とっても曖昧な形になっている。でもこの曖昧な案に固まるまでに、いろんな考え方を通ってきたり、アドバイスを受けたりして、こういうことになったのです。

a piano played by 5 pianists at once (first attempt)

田中 ▶ まず、ビデオを一つ見せつつ話しましょう。



田中 ▶ 「集団で従事することについてのサウンドトラック (Soundtrack for Collective Engagement)」というテーマを与えて、5人のピアニストにその曲を考え、協働で弾いてもらうその過程を記録した作品です。これはヴェネツィア向けにつくったものではなくて、ちょうどヴェネツィアのコンペに選ばれたぐらいの時期につくっていました。参加者はみんな大学生で、撮影も含めて全員UCI (University of California, Irvine [カリフォルニア大学アーバイン校]) の音楽学部と、美術学部の映像をつくっている学生たちと一緒に制作したものです。参加者の2人はクラシック専攻、2人がジャズ専攻、最後の1人の女性が即興音楽と作曲を専攻している。もちろん彼らは一緒に仕事をしたことはなくて、1台のピアノを5人で弾くという経験ありません。僕が与えたテーマは、この状況そのものについてのサウンドトラックをつくるというものでした。また一つのルールとして、その協働作業のプロセスでどのような手順を踏むのかということについては参加者の5人が自分たちで決めなければならないということを設定しました。最初1時間ぐらいはひとまず会場に用意された丸テーブルにどのように弾き始めるかということを座りながら話しますが、テーブルで話していてもしょうがないからピアノに行ってまずは弾こうよ、みたいになって5人がピアノの前に座って弾き始めるんです。例えば白いTシャツを着ているクラシック専攻の彼は、コード進行、つまりいわゆるクラシックな構造を持つ曲のつくり方にこだわりを持っているんだけど、他の人たち、特にジャズ専攻の2人は「まあ、なんでもできるよ」みたいな状態で、それぞれに話が噛み合わない状態が続きます。でも丸テーブルで話し合っていたときとは違って、手を動かしながら、ピアノを弾きながら会話が進行していくので、そこには建設的なものがありました。ある一つの課題が与えられて、一時的に人が集まって、そ

◀ a piano played by 5 pianists at once (first attempt)

2012 HD video, two pencil drawings 57 min.

Commissioned by University Art Galleries, UC Irvine,
Clare Trevor School of the Arts

Assistant director: Bryan Jackson

2nd AD/camera operator: JoAnn Hockersmith

DP/camera operator: Josh Secher

Camera operator: Maria Guerrero

Camera operator: David Luong

Gaffer/camera operator: Astrid Lugar

DIT: Patty Lin

Best girl electric: Olivia Yu

Key grip: Shaun Su

Best boy grip: Juan Luis Ulloa

Sound mixer: Michelle Teves

Sound mixer/boom: Yvonne Pon

Editing: Koki Tanaka

Sound sweetening: Taku Unami

Gallery director: Juli Carson

Associate director: Robert Plogman

Special thanks to Kei Akagi, Bruce Yonemoto

Participants (October 28, 2011): Adrian Foy, Kelly Moran, Devin Norris, Ben Papendrea, Desmond Sheehan

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_04.html

vimeo.com/kktnk/piano

の問題を解決しなきゃいけない。その状況に追い込まれた人たちが、どのような形で一緒に仕事をする事ができるか、あるいはできないか、そんなことに興味があってこうしたものをつくっていました。これは日本館とは関係なく始めていたことでした。だからそれほど明確に「震災」の問題をそこで考えていたわけではありません。でも僕の中では、これが震災の後に作られたものであるということもあって、まあ、アメリカで作られているし、いろんな意味ですごく距離がありますが、なにかしら関係があると思っていました。だから日本館で震災を考えるとなったときに、その最初の段階で蔵屋さんに見せたんですよね。それでたぶんこの方向性、言ってみればその距離も含む抽象性から震災の問題を扱うというアプローチもありえるんじゃないかなという話もしましたよね。

蔵屋 ▶ ここでは本当にいろんなことが起こるんですよね。クラシックの人はきれいな曲をつくりたくて、最初にコード進行を全員で共有して、それで伴奏の人、メロディーの人、高音部の装飾音の人が、全員そのコード進行で進めていけばきれいな曲になるよっていうふうに言うんです。金髪の女性は暴れん坊さんで、不協和音みたいなものを入れていかないとエキサイティングじゃないわ、とか言って、「ぼよ〜ん」という音をきれいな曲の真ん中に入れる。するとみんな苦笑いをしたりして。そのうちこのケリーという女性は、4人の男どもが熱中しているのに脇で欠伸をしたりとか、微妙なプロテストを始めたりするんです。特にこの作品について私がすごくおもしろいと思ってコンペで力説したのは、ルールづくりの過程です。鍵盤って1.5 mぐらいしかなくて、大人が5人も座ると本当にぎっしりなんです。だから片手で弾くのか両手で弾くのかから決めなければいけないし、あるいは座る場所でもう役割が決まっちゃうんです。つまり低音部に座ったら伴奏しかできなくて、真ん中でメロディーを弾いて覇権を握りたい男性とかがイライラしていたりするわけです。そういうことに気がついた彼らは、今度は5人で席を順繰りに入れ替えながらやってみるみたいな方法を編み出したりもするんですよね。

a poem written by 5 poets at once (first attempt)



◀ a poem written by 5 poets at once (first attempt)
2012 HD video 68 min. 30 sec.
Commissioned by The Japan Foundation
Directors of photography: Keiichi Negishi, Hikaru Fujii
Sound: Yui Kimijima
Editing: Koki Tanaka
Color correction: Kenichi Negishi
Post audio editing: Yui Kimijima
Camera assistants: Kousuke Haruki, Ryutaro Takei, Shinya Aoyama
Recording assistant: Masato Watanabe
Coordinators: Tae Mori, Yoko Oyamada
Project assistants: Hideki Aoyama, Takashi Fujikawa
Still photography: Takashi Fujikawa
Location: The Japan Foundation, Tokyo

田中 ▶ ここからは日本館に向けて作られていったものも見せたいと思います。これは

5人の詩人が協働で1つの詩を書く過程を記録したものです。テーマはまた僕から与えています。「ひとつの出来事を誰かと共有することについて」詩を書いてください、と。それもある種入れ子構造になっていて、今その場で5人が共有している出来事そのものを詩にする。ここでもちょっと特殊な撮影の設計をしていて、《ピアノ》のときと一緒に丸いテーブルを使っていますが、今回はテーブルとピアノを移動する必要がないので、その丸いテーブルが現場の中心にあり、その周りに円形のカメラ用レールが敷いてあります。そのレールに2台のカメラが載っていて、その2台のカメラがずっと周囲をぐるぐる回りながら様子を捉えている。それ以外に引きの固定のカメラが数台、自由に動き回れるカメラが1台と、全部で5台ぐらいのカメラを使っていて、撮影している状況、つまり撮影班全体も撮っています。

Equipment support: ARTISTS' GUILD

English translation: Dean Shimauchi

English subtitles: Kazuhiro Sakaguchi (STANCE COMPANY)

参加者(2012年10月15日): 柏木麻里(1970年生まれ)、
齊藤倫(1969年生まれ)、管啓次郎(1958年生まれ)、橋上(1984年生まれ)、三角みづ紀(1981年生まれ)

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_03.html

vimeo.com/66631353

蔵屋 ▶ だから多くの時間、5人の丸テーブルに座っている詩人がずーっと横にずれながら映ります。1人が映っているときに周りの人も映り込んでいて、その表情も見せられます。

田中 ▶ このビデオも1時間以上あってかなり長いものです。正直、通常のコンテンポラリーアートの展覧会で1時間以上のビデオって、はっきり言って非常識というか、誰もそんなに見れないよ、って言われそうで、これをヴェネツィア・ビエンナーレで見せると考えたとき、ちょっと長すぎるかなと僕も思ったんです。たぶんそういう大型の国際展って、見に来た人はだいたい10分くらい滞留して、それで次のところに行ってしまうと僕は予想していました。なので、そんなに長いビデオが複数ある状態が果たして効果的かどうかはその時点では迷っていたんですけど、いざ編集をしてみるとこれ以上削れないんですね。僕の場合、映画のように尺を最初にだいたい決めてそれに合わせて編集するわけではないので、必要な部分を繋ぎ合わせて、それでできあがった長さでよしとします。そうしたらこの長さになってしまった。

蔵屋 ▶ 私はこの撮影のときいられなかったけど、実際に何時間くらいやったんですっけ？

田中 ▶ 実際には5〜6時間。円形のレールを動くカメラはワンカットで3時間ぐらいの連続撮影。《ピアノ》のときもこの《詩人》も、脚本があるわけでもないし、とにかくどうやって協働作業が可能かをその場で考えることになるので、議論の終わりがなかなか見えないんですね。

蔵屋 ▶ 出来上がった詩を額装して、会場に飾ったんですけど、やっぱり丸テーブルに座って周囲にカメラがぐるぐる回っていることは心理的にとても大きかったみたいで、詩の中に月とか太陽とか丸くなる動物とか、丸をめぐるモチーフがすごくいっぱい出てくるんです。あと、その書いた紙を円形に並べて、テーブルの周りをぐるぐる回りながら順繰りに朗読するとか、丸ということベースにした詩作みたいなものが、5〜6時間かけてどんどんつくられていくというのがとてもおもしろくて。5人の詩人のうち4人は田中さんと同世代の方なんですけど、1人だけちょっと年上の方がいます。管啓次郎さんというとても有名な方

で、その人から人間関係が微妙にできあがっていくんです。管さんだけ大学の先生で経験も豊富なので、どんどん場を仕切っていくんですよ。じーっと見ていると、斉藤倫さんは比較的余裕があるんですけど、他の3人は「こうしたらいいんじゃないですか?」というアイデアをしきりに管さんの眼を見て説明し出すんです。つまり管さんに認めて欲しくて、一生懸命管さんを見つめるんです。やっぱり数時間丸テーブルに座って協働作業をしている間に、誰が場を仕切り、誰が反抗し、誰がそこから身を引いているのかということが、少しずつ浮かび上がってくるんです。

a pottery produced by 5 potters at once (silent attempt)



◀ a pottery produced by 5 potters at once (silent attempt)

2013 HD video, potteries 75 min.

Commissioned by The Japan Foundation

Created with Vitamin Creative Space

Project coordinator: Lu Jia

Consultant: Hu Fang, Zhang Wei

Production supervisor: Xie Nina

Director of photography: Su Yuming, Su Yi

Sound: Cao Lingfeng

Project assistant: He Li

Associate director of photography: Xiao Haoyi

Editing, color correction: Koki Tanaka

Post audio editing: Yui Kimijima

Camera assistant: Ma Yang, Zhang Zhe

Sound assistant: Wang Bin

Editing assistant: Wang Yue, Li Yueming, Fan Xueni

English translation: Yao Songqiao

Chinese transcriber: Rui Zhe Transcription Studio, Beijing

English subtitles: Zhu Xiaowen

Special thanks to: Chen Qifeng, He Cong, Hu

Mingkun (Kun Ge), Lin Ziyu, Liu Qingyuan, Luo

Baoquan, Luisa Treasca, Wang Guangyu, Wang Qi,

Wei Hua, Xu Qihai (A Hai), Yin Lin, Bruce Yonemoto

Participants (March 22, 2013): Wang Feng, Yuan

Liang, Han Qing, Duan Ran, Tan Hongyu

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/

project_06.html

vimeo.com/66631353

田中 ▶ この《陶芸》は《詩人》の後に撮影したもので、中国で撮ってます。5人の陶芸家が1つの陶器をつくるその過程の記録ですね。ここには実は協働作業の失敗が記録されています。《詩人》にもある意味では、協働作業の難しさを見て取れます。人間関係のパワーバランスが徐々に場を支配してって、協働することの失敗もそこに読み取れるかもしれない。でも少なくとも詩人たちは詩を書き上げていきます。でもこの《陶芸》では、最終的に1人の陶芸家が「もうやりたくない」と言い出して、途中段階のいくつかの陶器ができあがっただけで、合意形成されずに終わっていきます。最初のうちは楽しそうにみんなでやってみるんですけど、だんだんそれが崩れていく。

蔵屋 ▶ これもルールづくりのときにやっぱり造形作家さんたちなんで、5人で1個の器をつくるにはどうしたらいいかって議論していました。例えば陶芸って縄を最初につくるじゃないですか。あれを1人1本ずつつくって5個積んでみるとか、1人1壁ずつ立てて五角形をまず壺のベースにしてみるとか、いろんな分業の方法を考え出して作業が始まるんです。壺が作りたいたいのか平たい皿が作りたいたいのかみたいなことも考えながらやってって、最終的に4つできるんです。あと粘土の色が違うものを混ぜたりとか、いろんなことをするんです。ちなみにここは、北京から車でしばらく行った万里の長城の近所の村にある陶芸家夫婦がやっている窯です。私も立ち会ったんですけど、中国語なので英語や日本語のときみたいに撮影をやっても意味がわからないんですよ、何が起きているかわからない。

田中 ▶ そうですね。僕はときどき英語に通訳してもらっていたので少しは把握してたんですけど、録音もしているし、それほど広い場所じゃなかったので、蔵屋さんにまで通訳を付けられず、完全に放つかれちゃったんで何が起きているのか全くわからない状態でしたよね。

蔵屋 ▶ でもなんか見ていると、メガネをかけた女性がいますが、この人はわりとコンセプト的に協働作業というものを捉えていて、ちょっときれいにできかけるといきなり変な汚いものを入れようとしたりして、わりと挑発するんです。後で字幕を読んで、彼らが「こういう汚いものは芸術なのか？」みたいな、すごく原理的な「芸術とは何か？」みたいな話をしていたということがわかってびっくりしちゃったんですけど。

田中 ▶ 彼女はアユっていう愛称で呼んでましたが、広州美術学院の先生で現代陶芸家です。既成の陶器を組み合わせて立体をつくるようなタイプの人で、興味深いことに彼女は中国の少数民族による昔ながらの陶芸のつくり方を記録したドキュメンタリー映画も作っています。彼女はどちらかというと僕の側に近い、仕掛け人の側に近い立場にいる人だったんで、僕の意図をかなり早い段階で汲み取ってくれました。なので途中からインタビュアーみたいになって場を動かしていきます。彼女の左隣がこのスタジオ兼住居を持っている陶芸家で、その真向かいに座っている女性の陶芸家がパートナーで、一緒に住んでいて、この一番太っちょの彼とハンサムな彼が景德鎮出身で、優れた技術をもっているようでした。ハンサムな彼は、北京市内に陶芸教室を持っていて、いわゆる主婦や子どもたち向けに教室を開いたり、現代美術館の中にある工房でワークショップを開いたりとか、ビジネス的に成功しているタイプです。それぞれ別々のバックグラウンドを持っていて、住んでいる地域も異なり、それぞれの陶芸に対するスタンスが全く違って、最初は和気あいあいと「いつもはどうやってつくっているの？」みたいな感じでやっているんですけど、だんだん陶芸に対するスタンスのちょっとした違いが出てきます。例えば、作品をどう評価するのか、という問い。他者の意見に惑わされず自分が良いと思うものを信じて作り続けるという立場と、他者による評価が大切であるという立場、自分の美意識を押し通そうという立場と、どのようなものができるにせよ、この場が楽しければいいという立場、そうした対立が徐々に亀裂をつくって、自分がやっている陶芸とは何なのか、自分が今までしてきた芸術行為とはどういうものなのかという、参加者それぞれにとって原理的な、結構しんどい問題にどんどん近づいていく。最終的にはその触れられたくない場所が目の前に生じてきて、「もう続けたくない、もう疲れた」みたいになって、終わっていくんです。

蔵屋 ▶ 参加者の年齢や人生経験が上がっていくと、学生さんみたいにその場でケンカするだけでは終わらなくて、人生で考えてきたことそのものが問われているみたいになってしまいました。元々タスクを与えて、造形的なことをやらせてもらおうという単純な仕組みだったことが、ここまでいってしまったのかっていう。このビデオはとても恐かったですね、私は。

協働をアーカイブする

田中 ▶ ここで、ヴェネツィア・ビエンナーレの日本館会場を含めた全体のドキュメンタリーを見てもらいたいと思います。

蔵屋 ▶ 30分見ていただいて、その後少し「抽象的に語ること」というのが何だったのかとか、ヴェネツィア全体がどういう雰囲気私たちはなぜ賞をもらったのかとか、そういうところまで行きたいと思っています。



田中 ▶ これは映画監督でもあるアーティストの藤井光さんにつくってもらったものです。彼には《階段》(《a behavioral statement (or an unconscious protest)》2013)と《詩人》のビデオでも撮影で参加してもらってます。彼の最近の仕事だと、「プロジェクトFUKUSHIMA!」(2011年5月発足)という、大友良英さんたちが中心になって福島で音楽祭を開くというプロジェクトがありましたが、そのドキュメンタリー映画『プロジェクトFUKUSHIMA!』(2012)も作っています。また、「3.11アート・ドキュメンテーション」(2011-)という名前で、被災地でのアーティストの活動を記録する活動もしています。藤井さんはずっと日本が抱える社会問題を冷静な距離を持った撮影によってあぶり出していくような、そんな仕事をしています。この日本館のプロジェクトを進める上で個人的な対話の相手にもなってもらいたいと思い、協力してもらいました。

蔵屋 ▶ 彼の問題意識は、この展示ができるまでにはたくさんの労働が関わっているという点にあります。つまりすごい数の労働があって、でもオープンした途端に「アーティスト・田中功起」だけに焦点があたって、彼が表彰状をもらって、それまでの労働が全部背後に退いていくという関係を——私も現地にながら非常に「変なものだな」と思っていたのですが——藤井さんは問題にしていたんです。たぶんみなさんも京都という場所でPARASOPHIAという催しをされるときに、裏方となって働かれる方も多いかと思うんですけども、実はその膨大な労働とそれから光を浴びる部分の関係というのは、自分たちが開催するにあたっては、とても重要な問題になってくるのではないかというふうに思っています。

◀ 第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展 日本館

2013 34 min. 11 sec.

監督：藤井光

vimeo.com/78105394

藤井光【ふじい ひかる】

1976年東京都生まれ。美術家、映像作家。

hikarufujii.com silentlinkage.com

a behavioral statement (or an unconscious protest)

2013 HD video 8 min.

Commissioned by The Japan Foundation

Directors of photography: Keiichi Negishi, Hikaru Fujii

Sound: Masato Watanabe, Kyohei Tsuchiya

Editing: Koki Tanaka

Color correction: Kenichi Negishi

Post audio editing: Yui Kimijima

Camera assistants: Kousuke Haruki, Kana Yoshida, Michiko Tsuda

Coordinators: Tae Mori, Yoko Oyamada, Miwa Kane-ko, Mihoko Kobayashi, Reiko Nariyama

Project assistants: Hideki Aoyama, Takashi Fujikawa
Still photography: Takashi Fujikawa

Location: The Japan Foundation, Tokyo

Filmed with the cooperation of the Korean Cultural Center, Korean Embassy in Japan

Equipment support: ARTISTS' GUILD

参加者(2012年10月5日)：阿部尚久、飯澤展明、泉友里、伊東正伸、今井由華、上杉啓明、江口智美、大串つやこ、大西真、奥裕子、忍田幸男、越智彩子、葛山洋、金子美環、金子勇太、倉田順子、小出哲也、小林美帆子、佐藤訓子、下山雅也、庄司理恵、正野圭治、鈴木雅之、高口真法、高島まな、武田英和、高原文宏、橋裕子、田中伸一、田原真己恵、田村彩、塚本倫久、丁寧、歳森真紀、中島遥香、中村友子、成山玲子、庭山由佳、野口晃佑、野田昭彦、姫田美保子、平野里佳、藤田葉子、夫津木美佐子、保科輝之、本多麻由、松永一範、三宅章太、宮本薫、宮森房子、村上樹里、室岡有紀子、山口裕輝、良知加苗
2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_01.html



vimeo.com/63143361

2013年のヴェネツィア・ビエンナーレ

田中 ▶ というわけで、前提の話がかなり長かったのですが、ある意味ではここからが本題なんですけど、協働の話が続けましょう。どこから話しますか？

蔵屋 ▶ まず賞(特別表彰)をいただいたということなんですけど、このことは今観ていただいたドキュメンタリーのエンドロールにたくさんの人の名前があったり、藤井さんが裏で働いている人の姿を華やかな場面に挟み込んでいったことでも深く関係しています。今回いただいた賞は、単純な作品の出来の善し悪しでもらったわけではありません。**賞の審査員**は非常に若いチームで、だいたい30代後半から40歳ぐらいの人でしたけれど、彼らには賞を与えるにあたって明確な基準がありました。ヴェネツィアのホームページに審査員は何を考えて選んだかということが、こういうふうに書いてあるんです。「審査員は各地域における拡張しつつある実践について、オリジナルな洞察を示そうとしたパピリオンに特に注目しました。受賞した各パピリオンの持つ協働作業的な性質は、目覚ましい経験をもたらしました」。つまり、実は協働作業を問題にしているということが、賞全体の判断の大きな理由になっていたんです。日本館の受賞理由は、「協働作業とその失敗に関する胸をえぐるような省察に対しての評価」です。ここには単に作品の良い悪いではなくて、今協働作業ということがとても重要で、その問題意識を共有している館に光を当てたかったんだよ、という審査員のはっきりした意識が述べられていたんです。



他の館がどういう展示をしていたかとか、どういう館が受賞したのかについて少し説明します。まず、一緒にスペシャル・メンション(特別表彰)をもらったアメリカの**シャロン・ヘイズ**(Sharon Hayes)の作品(《Ricerche: three》2013)。これも長いドキュメンタリーになっていて、集団インタビューをしています。女子大生を10人ぐらい集めて、性生活について赤裸々なインタビューをします。例えば「週何回、彼氏とエッチしていますか？」みたいなことを言わせる。赤裸々なことなんだけど、彼女たちも迷ったり、でもちょっと蓮っ葉なふりをしたり、遊んでいるふりをしたりして答えていくうちに、本当のことをちゃんと

第55回国際美術展 審査員

審査員長: ジェシカ・モーガン(1968年イギリス生まれ/キュレーター、テート・モダン)

審査員: ソフィア・ヘルナンデス・チョン・クイ(1975年メキシコ生まれ/タマヨ美術館館長)、フランチェスコ・マナコルダ(1974年イタリア生まれ/テート・リバプール館長)、ピシ・シルバ(1962年ナイジェリア生まれ/センター・フォー・コンテンポラリー・アート[ラゴス]館長)、アリ・スポトニック(1972年アメリカ生まれ/キュレーター、ハマー美術館)

第55回国際美術展 国際展参加作家部門

金獅子賞: ティノ・セーガル(1976年イギリス生まれ/セントラル・パピリオン、ジャルディーニ)/授賞理由: 「アートの領域を拡張する先進的で優れた実践が評価された」(ヴェネツィア・ビエンナーレ[ART iT訳])

銀獅子賞(新人賞): カミーユ・アンロ(1978年フランス生まれ/コルテリエ、アルセナーレ)/授賞理由: 「現代を捉える感覚的かつダイナミックな方法の新作を発表」(ヴェネツィア・ビエンナーレ[ART iT訳])

特別表彰: シャロン・ヘイズ(1970年アメリカ生まれ/コルテリエ、アルセナーレ)/授賞理由: 「他者であることの重要性和、私的領域と公的領域との相互作用の複雑さについて改めて考えさせられたため」(ヴェネツィア・ビエンナーレ)

特別表彰: ロベルト・クオーギ(1973年イタリア生まれ/コルテリエ、アルセナーレ)/授賞理由: 「国際展への意義深く強い貢献のため」(ヴェネツィア・ビエンナーレ)

第55回国際美術展 国別パピリオン部門

金獅子賞: アンゴラ(エドソン・チャガス「Luanda, Encyclopedic City」)/授賞理由: 「共にサイトの矛盾と複雑さについて共に考えるキュレーターと作家に授賞」(ヴェネツィア・ビエンナーレ)

特別表彰: キプロスならびにリトアニア(グループ展「Oo」/「oO」)/授賞理由: 「ニヶ国をひとつの体験に統合する独創的なキュレーションに授賞」(ヴェネツィア・ビエンナーレ)

特別表彰: 日本(田中功起「抽象的に話すこと——不確かなもの共有とコレクティブ・アクト」)/授賞理由(原文): 「...for the poignant reflection on issues of collaboration and failure.» (La Biennale di Venezia)

第55回国際美術展 生涯功績への金獅子賞

マリア・ラスニック(1919年オーストリア生まれ)

マリサ・メルツ(1926年イタリア生まれ)

ているんだけど互いに役割分担ができてきます。この娘は清純なフリをしている、この娘は遊んでいるフリをしている、みたいな人間関係が出来上がっていった、本当の自分とグループとの中で役割を割り当てられて演じている自分との境界がわからなくなっていく。田中さんの考え方にちょっと似ていてびっくりしちゃったんですね。

次に、**グルジア館**はわりと新しく参加を始めた国で、日本館のように建物を持っていないので、既存の古い建物の上に許可をもらい、バラックみたいなものを協働作業で建てたんです。その中に数組の若いアーティストたちが自分の展示をするという形になっています。ここにはグルジア人のアーティストとコンビを組んでいる、荒川医さんも出ていました。これも若い人たちがゲリラ的に建物を建てる協働作業をやっていたわけです。

そして、金獅子賞を国別パビリオンでもらった**アンゴラ館**。アンゴラの首都ルワンダで撮ったゴミの写真をポスターにして床にいっぱい積んであって、一人一枚ずつ持って帰って、自分の好きなルワンダのカタログをつくってください、という作品でした。これはアーティストと観客がまずコラボレーションしているんですね。さらにここはパラッツォ・チーニ (Palazzo Cini) と言って、大金持ちが集めたポッティチェリとかジョットとかの名画が周りに飾ってあって、実はこういうふうに絵の中の青色とルワンダのペンキの剥げた青い壁みたいなものが、ちゃんとコラボレーションになっているんです。だから遠く離れたルワンダとイタリアのお屋敷とが色で繋がれているという、そういうふうになっているものでした。



こんなふうに、今回のヴェネツィア・ビエンナーレは、そんなにお金がかかってるわけではない、けれど「観客と作品」とか、「アーティストとアーティスト」とか、あるいは「既存の建物とバラック」とか、いろんなものがコラボレーションしていく中で、良いことも生まれるけど汚いことも生まれる、そういう展示をやっている館が目につきました。日本館も含めてどれもそんなに大規模な予算をもって派手にやっている館ではありません。その協働作業というテーマに日本館はマッチして評価をいただいたのだと思っていて、そのことが私はすごく嬉しかったです。世界中の若手と、新しい社会をつくるためには、人と話し

第55回国際美術展 グルジア館

タイトル:「カミカゼ・ロジッア」

参加作家: テア・ジョルジャツェ (1971年グルジア生まれ)、ギオ・ゾンパツェ (1976年グルジア生まれ)、ゲラ・パタシュリ (1973年グルジア生まれ) with 荒川医 (1977年日本生まれ) とサージ・チェレブニン (1981年アメリカ生まれ)、パイヨン・グループ (2008年グルジアで結成)、ニコロス・ルティツェ (1984年グルジア生まれ) コミッショナー: マリーン・ミザンダリ (1963年グルジア生まれ/グルジア文化・遺産保護省副大臣) キュレーター: ヨアナ・ヴァルシヤ (1976年ポーランド生まれ)

会場: グルジア館、アルセナーレ

www.georgian-pavilion.org

第55回国際美術展 アンゴラ館

タイトル:「ルワンダ:エンサイクロペディック・シティー」

参加作家: エドソン・チャガス (1977年アンゴラ生まれ)

コミッショナー: アンゴラ文庫省

キュレーター: ビヨンド・エントロピー (パウラ・ナシメント [1981年アンゴラ生まれ/ディレクター、ビヨンド・エントロピー・アフリカ]、ステファノ・ラボッリ・バンセラ [1980年イタリア生まれ/ディレクター、ビヨンド・エントロピー]、ジョルジュ・グンベ (1959年アンゴラ生まれ)、フェリシアーノ・ドス・サントス (1964年モザンビーク生まれ)

会場: パラッツォ・チーニ、サン・ヴィオ、ドルソデューロ864

受賞: 国別パビリオン部門金獅子賞

www.beyondentropy.com

第55回国際美術展 キプロス館

タイトル:「Oo」

参加作家: ナタリー・イアクシ (1980年キプロス生まれ)、ファノス・キリアコウ (1977年キプロス生まれ)、デクスター・シニスター (1973年イギリス生まれ)、コンスタンティノス・タリオティス (1983年キプロス生まれ)、ジェイソン・ドッジ (1969年アメリカ生まれ)、マリア・ハサビ (1973年キプロス生まれ)、リア・ハラキ (1975年キプロス生まれ)、モートン・ノルビエ・ハルヴォルセン (1980年ノルウェイ生まれ)、ガブリエル・レスター (1972年オランダ生まれ)、ミリアム・レフコウィッツ (1980年フランス生まれ)

コミッショナー: ルーリ・ミカイリドウ (キプロス教育・文化省文化部)

副コミッショナー: アンジェラ・スコーティ (建築家)、マリカ・イオアノウ

キュレーター: ライムダス・マラサウスカス (1973年リトアニア生まれ)

会場: パラスポート・アルセナーレ、カッレ・サン・ピアーゾ2132、カステッロ

受賞: 国別パビリオン部門特別表彰 (リトアニアと共同)

www.oo-oo.bo

合ったりケンカしたりしなければならず面倒くさい、それでも本当にこれを続けるのか?という問いが共有されていました。しかもそれを巨額なお金をかけて派手なプレゼンするのではなく、長い時間をかけて観客が自分で考えないとわからないような形で地味にプレゼンしていて、蓋を開けたらいくつもの館にその意識が共有されていました。共有されている問題を審査員が拾ってそれに光を当てたということ、その一角に居させてもらったのだと思っています。

田中 ▶ 確かに審査員の人たちもわりと若い、僕と蔵屋さんの間くらいの世代の人たちがほとんどでした。マッシミリアーノ・ジョーニによるテーマ展でも国別同様に賞が与えられるのですが、そこで金獅子賞をとったのも僕より一個年下の**ティノ・セーガル**(Tino Sehgal)でした。受賞者も審査員もみんな同じ世代で、なんだか和気あいあいとやっている感じがあって(一方でなあなあ感じもあったけど)、そこで「協働」という問題が共有されている感じがしました。

蔵屋 ▶ 世代で括っちゃって、じゃあ年を取ったらダメなんだというのは全然よくないと思うんですけど。ただ精神において若い意識が共有されていた場だったということは強く感じました。

逆に、ジェレミー・デラー(Jeremy Deller)の**イギリス館**の展示は、作品がすごく良くて、私と田中さんはてっきりここが金獅子だと思い込んで授賞式の会場で「あの人がそうじゃない?」とか言って、全然知らない人の写真を撮っていたりしたんですけど(笑)。イギリスの隠された社会問題を拾ってきて、5つぐらいの部屋にして、それを周るといつくりになっていました。例えば皇太子の友達が天然記念物の鳥を撃っちゃった、でもそのことを隠していた、とか。デヴィッド・ボウイが1972年にツアーをやったときに若者が熱狂したんだけど、実はその同じ年、失業問題に対して暴動が起きていて、若者たちはデヴィッド・ボウイに陶酔することでそこから逃げていた、とか。そうした問題が丹念なりサーチで浮かび上がってくる展示だったんです。ただ、中身はとてもよかったですけど、展示にとってもお金がかかっていたんです。5つの部屋を完璧にインスタレーションして、お茶のサービスもあって、たくさんの人を雇って、石器を触らせてくれるコーナーがあったりして。中身はいいのに、お金を使っていることが、今回のビエンナーレに関してはなぜか非常に浮いて見えなりました。

ヴェネツィア・ビエンナーレって通常、たいへんなお金が動く場所です。ワーって派手なインスタレーションをやって、見る人をドッキリさせて、その中で賞をもらう。すると、その作家さんが世界で売れて、画廊がまたお金をつぎ込んでその人をプロモーションして、という。そういう側面が今でもあることは全然否定できないんです。でもその中で、あえてジョーニというディレクターと若い審査員チームが、派手ではない、お金ではない、そして人目を奪う巨大インスタレーションでもない、地味だけど日常からじっくり考えていて、見る人も1時間とか頑張って見ないとわからない作品を今年のヴェネツィアの色としてアピールしようとしたこと、これはヴェネツィアが持っているトーンというものに対する大きな批判だったのではないかと感じて、そのことはすごくおもしろかったです。

第55回国際美術展 リトアニア館

タイトル:「oO」

参加作家: ナタリー・イアクシ(1980年キプロス生まれ)、カジス・ヴァルネリス(1917-2010/リトアニア出身)、フアノス・キリアコウ(1977年キプロス生まれ)、アルギルダス・シェシュクス(1945年リトアニア生まれ)、デクスター・シニスター(1973年イギリス生まれ)、ヴィタウテー・ジリンスカイター(1930年リトアニア生まれ)、コンスタンティノス・タリオティス(1983年キプロス生まれ)、ギンタラス・ティジャペトリス(1985年リトアニア生まれ)、ジェイソン・ドッジ(1969年アメリカ生まれ)、エレナ・ナルブタイテ(1984年リトアニア生まれ)、マリア・ハサビ(1973年キプロス生まれ)、リア・ハラキ(1975年キプロス生まれ)、モートン・ノルビエ・ハルヴォルセン(1980年ノルウェー生まれ)、リュドヴィカス・ブクリス(1984年リトアニア生まれ)、ガブリエル・レスター(1972年オランダ生まれ)、ミリアム・レフコウィッツ(1980年フランス生まれ)

コミッショナー: アウリメー・アレクサンドラヴィチウーテ&ヨナス・ジャカイティス(元・チューリップス&ローゼス[ブリュッセル])

キュレーター: ライムダス・マラサウスカス(1973年リトアニア生まれ)

会場: パラスポート・アルセナーレ、カッレ・サン・ピエーゾ2132、カステッロ

受賞: 国別パビリオン部門特別表彰(キプロスと共同)

www.oo-oo.co

第55回国際美術展 イギリス館

タイトル:「イングリッシュ・マジック」

参加作家: ジェレミー・デラー(1966年イギリス生まれ)

コミッショナー: アンドレア・ローズ(ブリティッシュ・カウンシル視覚芸術部門ディレクター)

キュレーター: エマ・ギフォード=ミード(ブリティッシュ・カウンシル視覚芸術部門キュレーター)

会場: イギリス館、ジャルディーニ

venicebiennale.britishcouncil.org

田中 ▶ ちなみに艾未未[アイ・ウェイウェイ]は、スペクタクルすぎてちょっとずれている感じが(笑)。

蔵屋 ▶ いやいや(笑)。じゃあ今年の流行は地味で貧乏そうな感じだから、急に「お金使った館、恥ずかしいんじゃない？」みたいに言うこと自体も私たちは警戒しなきゃいけないと思うんですけどね。今年はフランス館とドイツ館が館を交換するというで最初話題を呼んだんです。でもそれは非常に政治的な決定でした。じゃあ中身の対話があったかということ、実はあまりそうではなかった。

田中 ▶ ちなみに艾未未はドイツの代表アーティストの一人としてフランス館に出して、フランス代表としてドイツ館に出していたのがアンリ・サラ(Anri Sala)だったんですね。

蔵屋 ▶ どちらも作品はよかったけれど、せっかく館を交換したのに中身に対話があまりなくて。1週間ぐらい展示作業をしていた間も、結構互いにツーンとかしてるんだよね(笑)。ドイツチームとフランスチームが「絶対中を見せないぞ」みたいにライバル心をむき出しにしていました。せっかく館を交換したことの効果が、ちゃんと生かされてなかったような気がしますね。

「抽象的に話すこと」の必要性

田中 ▶ では、あまり時間はありませんが質問を受けましょう。

質問 ▶ 日本館でされるのなら、日本の哲学を訴えかける方がいいのではないですか？ 抽象性と具体性は一对で本質がわかってくるもので、やっぱり明確なキーワードのあるインパクトが必要なのではないかと思います。

田中 ▶ 僕は「震災」を出発点として「抽象」を導き出したので、それは「日本」についての哲学と言うこともできると思います。だけれども、そこで問題にすべきは「日本」だけではなく、そこからどこまで別の現実には到達できるかという視点です。あの「震災」だけが問題ではないということ。以前にも震災はあったし、あるいは災害は起きてきたし、戦争だっていつ起きるかわかりません。そうした最悪の状況の中で育まれた思考を言葉にするためには、抽象が役に立つと思っています。その言葉が語りかける相手は、全ての人です。「抽象」は「具体」と対になる反対物ではありません。複数の「具体」が集まることで「抽象」が生じます。「具体」とは明確な意見と考えてもらってもかまいません。僕は個別の作品をかなり明確に作っています。そこには情感さえもあまりなく、ただ分かりやすさだけがあります。しかし明確な意見が複数集まるとどうなるでしょうか。異なるたくさんの意見が集まると、どこに向かうのか分からない、曖昧な状態になります。僕らはそこで途方に暮れます。でもそれは複数の異なる意見たちをなんとか抱えようとする態度です。曖昧さの内側には具体的であればらのものがたくさん集まっていて、どうしていいかわからないけど、だからこそ

第55回国際美術展 ドイツ館

タイトル:「ドイツ館2013」

参加作家: 艾未未[アイ・ウェイウェイ](1957年中国生まれ)、ロムアルド・カーマカー(1965年フランス生まれ)、ダヤニータ・シン(1961年インド生まれ)、サントウ・モフォケン(1956年南アフリカ生まれ)

コミッショナー: ドイツ外務省、ドイツ対外文化交流研究所(ifa)

キュレーター: スザンネ・ゲンスハイマー(1967年ドイツ生まれ/フランクフルト近代美術館[MMK]館長)

会場: フランス館、ジャルディーニ

www.deutscher-pavillon.org

第55回国際美術展 フランス館

タイトル:「ラヴェル・ラヴェル・アンラヴェル」

参加作家: アンリ・サラ(1974年アルバニア生まれ)

コミッショナー: アンスティチュ・フランセ、フランス国立造形芸術センター(CNAP)、フランス文化・通信省、フランス外務省

キュレーター: クリスティーン・マセル(1969年フランス生まれ/チーフキュレーター、ジョルジュ・ボンビドゥー国立美術文化センター)

会場: フランス館、ジャルディーニ

www.pavillonfrancais.com

僕は考え続けることができる。僕が「抽象」に込めているのはそうした在り方です。このいわば合意形成の不可能性としての「抽象」はどこかの遠いだけかにも理解できます。なぜならそれは今、僕たちが直面している問題だからです。僕はスペクタクルにおぼれるくらいならば、曖昧で、見えにくい淀みの中に撤退し、言葉を探したいと思っています。

蔵屋 ▶ 例えば仮定として、被災地の写真とか、泣いてる人のドキュメンタリーとかを流してみたとしましょう。そうするとヴェネツィアみたいに、遠い場所で「アートだ！」って浮かれている人たちにどういふふうに見えるかという、「遠くて大変なことがあったのね。かわいそう」で終わってしまうのではないかと思います。それは、「日本がたいへんだ」とか「日本が立ち上がる」といふふうにするところではないかと思ったんです。今お見せた作品は、陶器をつくっていたりピアノを弾いていたり、全然震災と関係ない遠回りな表現ですよ。でも、複数の人が一個の課題に取り組んで出来たり出来なかったりするといふ、共通する単純な構造を持っています。だからピアノを弾いていたり、陶器をつくっていたりする部分を振り落としてみると、「震災が起こっちゃった。次に社会をどうやってつくるのかな」とか、あるいは震災に限らず「国が戦争で荒れちゃった。でもこれから自分たちは話し合いながら社会をつくっていかなくや」とか、世界中から来たいろんな人たちに、自分の問題として、今、日本が経験していることを伝えることができると思ったんです。これが「抽象的に語る」と田中さんがタイトルをつけた理由だったのではないかと思います。遠回りだから通じる、遠回りだからそこに隙間がいっぱいできて、その隙間に自分の思いや経験を反映させることができる。だから自分の問題としていかに遠い場所の人にも届けることができる。

さっき言ったように、ヴェネツィアって、例えば「愛」とか「死」とか世界中に共通する感情にインパクトを与えるようなテーマを立て、巨大インスタレーションをつくって、その中に入ると心を奪われちゃうというタイプの作品がー頃、90年代は多かったんですね。でも、今回のヴェネツィアは、地味で時間をかけないと曖昧でよくわからない。でも頭を使わなくやって思わせるものが多かったのは、感覚に訴え、インパクトで驚かされて、一瞬でわかっちゃうものに対して世界のみなさんが警戒心を持っているからじゃないかと。もちろん、ワーっとわかって、ワーっと感動するものも良い面もあるけれど、でもわけがわからないうちに感動させられて、一つの方向に持っていかれることも往々にして起こるわけです。そういう、瞬間的に驚かされることじゃなくて、もうちょっと曖昧なことをのんびりじっくり考えないとまずい時代なんじゃないか、と思っている人が多いのではと思います。これが「日本がどうなったか」「日本が立ち上がるぞ!」というのではないやり方で、世界の人たちと意識を共有するために私たちが1年かけて考えた方法だったんだと思います。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015 オープンリサーチプログラム02[報告会]田中功起+蔵屋美香「抽象的に話すこと—ヴェネツィア・ピエンナーレに参加して」

日時: 2013年7月27日(土) 19:00-20:30

会場: 同志社大学今出川キャンパス 良心館地下2番教室

主催: 京都国際現代芸術祭組織委員会、一般社団法人京都経済同友会、京都府、京都市

後援: 国際交流基金

写真撮影: 西浦綾桂、光川貴浩

運営協力: 大石祥子、川西美里、古俣皓隆、清水明日香、角千波、蓮田真優美、安田七海、山本育恵、尹志慧、好光義也

謝辞: 越前俊也

www.parasophia.jp/events/a/koki-tanaka-mika-kuraya

この記録は、オープンリサーチプログラム02[報告会]田中功起+蔵屋美香「抽象的に話すこと—ヴェネツィア・ピエンナーレに参加して」のテブ起こしを編集したものに、編集者がハイライトと補足情報を追加したものです。



The following are the section titles and notes added to the full, unabridged Japanese transcript by the editors.

Open Research Program 02

Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015

The Kyoto International Festival of Contemporary Culture is an international exhibition of contemporary art presented by the Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee, the Kyoto Association of Corporate Executives, Kyoto Prefecture, and Kyoto City that brings together the rich cultural heritage and the vibrant academic environment of Kyoto.

The first exhibition, *Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015*, is scheduled to be held from March 7 to May 10 in 2015 at the Kyoto Municipal Museum of Art, the Museum of Kyoto, and other locations in Kyoto (see publication data).

Shinji Kohmoto 河本信治

Artistic Director, *Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015*; former Chief Curator, The National Museum of Modern Art, Kyoto.

The Japan Pavilion at the 55th International Art Exhibition, La Biennale di Venezia

Title: *abstract speaking—sharing uncertainty and collective acts*

Artist: Koki Tanaka (b. 1975 in Japan)

Commissioner: The Japan Foundation

Curator: Mika Kuraya (b. 1966 in Japan; Chief Curator, The National Museum of Modern Art, Tokyo)

Venue: The Japan Pavilion, Giardini di Castello

Award: Special mention for National Participations

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp

Koki Tanaka 田中功起

Born 1975 in Tochigi, Japan. Artist. Currently based in Los Angeles. Held solo exhibition *Here shows recent works in new installations, by the way.* at the Museum of Modern Art, Gunma in 2008–09. Group exhibitions include *La Cabane* (Palais de Tokyo, Paris, 2006), the 2006 Taipei Biennial, the 7th Gwangju Biennale (2008), and many others. www.kktnk.com/alter twitter.com/kktnk

The following is a translation of excerpts from *Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015 Open Research Program 02 [Report] Koki Tanaka & Mika Kuraya “abstract speaking—participating in the Venice Biennale”* (July 23, 2013). Highlights added by the editors.

Shinji
Kohmoto
(S.K.) ▶

My name is [Shinji Kohmoto](#), and I am the Artistic Director of [Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015](#). First of all, I would like to thank everyone in the audience for joining us today. The purpose of the Open Research Program is to share part of our process of research and studies toward 2015 with the public, and to share our learning experience with our audience. For our second Open Research Program, we have invited the artist [Koki Tanaka](#) and curator [Mika Kuraya](#) who are [representing Japan at the Venice Biennale this year](#). The Venice Biennale is of course what is commonly considered the original international exhibition of art amongst all the biennales and triennales being held today. I believe it is also roughly equal to Kassel's enormous Documenta in scale. Today, Mr. Tanaka and Ms. Kuraya will give us a report on their experience of participating in the Venice Biennale, to give our team an idea of what an international exhibition of art is, and of the preparatory and problem-solving processes faced by the artist and the curator selected to participate in such an exhibition.

abstract speaking
—participating in
the Venice Biennale
[abridged]
Koki Tanaka & Mika Kuraya

Mika Kuraya 蔵屋美香

Born 1966 in Chiba, Japan. Chief Curator, The National Museum of Modern Art, Tokyo. Exhibitions curated by Kuraya include *Traveling: Towards the Border* (2003), *Waiting for Video: Works from the 1960s to Today* (2009; co-curated with Kenjin Miwa), *Lying, Standing and Leaning* (2009), *Meaningful Stain* (2010), *On the Road* (2011), and *Undressing Paintings: Japanese Nudes 1880–1945* (2011–12). All exhibitions listed held at the National Museum of Modern Art, Tokyo.

about the Venice Biennale

Koki Tanaka, Mika Kuraya “Abstraction and the Possibilities of Collaboration—Report on the 55th International Art Exhibition of the Venice Biennale” (Wochi Kochi Magazine, August 2013)

Japan Foundation JFIC Hall “Sakura,” July 18, 2013

www.wochikochi.jp/english/topstory/2013/08/abstract-speaking.php

55th International Art Exhibition, La Biennale di Venezia (hereinafter “Venice Biennale 2013”)

Dates: June 1–November 24, 2013

Preview: May 29–31, 2013

Award ceremony and inauguration: June 1, 2013

Venues: Arsenale, Giardini di Castello, and other locations around Venice

www.labiennale.org/en/art

Venice Biennale 2013: National Participations

88 National Participations

Participating for the first time: Angola, Bahamas, Bahrain, Ivory Coast, Kosovo, Kuwait, Maldives, Paraguay, and Tuvalu

Venice Biennale 2013: International Exhibition

Artistic Director: Massimiliano Gioni (b. 1973 in Italy; Associate Director and Director of Exhibitions, New Museum, New York)

Title: *Il Palazzo Enciclopedico (The Encyclopedic Palace)*

Participants: Over 150 artists from 38 countries

Venice Biennale 2013: Collateral Events

“47 Collateral Events, approved by the curator of the International Exhibition and promoted by non profit national and international institutions, take place in several locations in Venice.” (La Biennale di Venezia)

The Japan Pavilion

Designed by: Takamasa Yoshizaka (1917–1980)

Completed in: 1956

Location: Giardini di Castello

Address: Padiglione Giapponese Giardini della Biennale, Castello 1260, 30122 Venezia

on the competition

The Japan Foundation

“The Japan Foundation, established in 1972 as a special legal entity supervised by the Foreign Ministry and reorganized as an independent administrative institution in October 2003, is the first organization that specializes in international cultural exchange in Japan.” (The Japan Foundation)

www.jpff.go.jp

Competition for the Japan Pavilion at the 54th International Art Exhibition, La Biennale di Venezia (competition held in 2010)

Participants (titles as of 2010) and submissions:

- Yuka Uematsu (Curator, The National Museum of Art, Osaka): Tabaimo “*Chō-Garapagosu shindorōmu* [Trans-Galapagos Syndrome]” (tentative)

- Santo Oshima (Curator, Suntory Museum, Osaka): Yuki Kimura, solo exhibition with theme based on the Katsura Imperial Villa

- Mami Kataoka (Chief Curator, Mori Art Museum, Tokyo): Chiharu Shiota

- Mika Kuraya (Chief Curator, The National Museum of Modern Art, Tokyo): Koki Tanaka

- Yuri Mitsuda (Curator, Shoto Museum of Art, Tokyo): Kumi Machida & Yoshiou Sakagishi “Bright Matter: high density of vacancy”

- Yusuke Minami (Chief Curator, National Art Center, Tokyo): Kazumi Nakamura “Birds in their Existence, in the Broken Cage”

on the competition

The selection process for the Japan Pavilion as described by Tanaka and Kuraya is as follows:

1. Around March, the Japan Foundation invites roughly five or six curators (art museum curators, art critics, etc.) to participate in the competition.

2. Each curator chooses an artist.

3. The curator and artist have approximately one month to prepare an exhibition proposal.

4. Around April, the curator—not the artist—presents the proposal to the jury.

5. The jury selects the proposal that will be realized in the Japan Pavilion. The artist is officially announced around May/June, approximately one year before the exhibition will open.

Mika Kuraya

(MK) ▶ Why did I ask Mr. Tanaka to work with me this time? Well, actually, this is not the first time. I was also approached to propose a plan for the [54th International Exhibition of Art of the Venice Biennale in 2011](#), when Tabaimo exhibited at the Japan Pavilion, and so I asked Mr. Tanaka to work with me and we made a proposal.

[The proposal](#) was about toilet paper—something that you find all over the world, and we came up with 1,000 different ways to use toilet paper that did not involve wiping your bottom like how you would normally use it. These would then be filmed and shown in booths set up in the venue. Since we had worked together to develop this detailed plan last time, I wanted to ask him to make a proposal with me again. The first thing I considered was that in representing Japan in an international art exhibition at that time, when we had just experienced the Tohoku disaster (March 11, 2011), it was quite unthinkable that we wouldn't deal with it in some form or other. But when I approached him I just could not find any way to link my wanting to do something together with the artist Koki Tanaka with my wanting to deal with the theme of the disaster, so I was feeling pretty conflicted about it.

Koki Tanaka

(KT) ▶ For the competition in 2010, Ms. Kuraya already had a pretty firm idea in mind when she came to me, but this time it was more a case of calling me up and asking me, “How about it? Do you want to do this again?” For [the Venice Biennale](#) immediately following the Tohoku earthquake and tsunami, [Tabaimo](#) represented Japan, but it would have been difficult to change the exhibition plan to deal with the disaster in such a short time—a mere four months after it happened. In that sense, this was the first time in Venice that a Japanese artist would be expected to deal with the post-quake situation. Putting aside my personal interests and my work up to that point, I felt like I had to deal with the issues of the disaster. We started off with the mindset that we should just think about it regardless of whether it would be likely to get us selected or not.

MK ▶ We didn't have any concrete ideas, though. In March we had gone up to the disaster area with the artist Ken Sasaki, but our minds just froze up with the feeling of helplessness. But we only had about two weeks until the proposal deadline.

I met with Mr. Tanaka at AOYAMA | MEGURO, a gallery in Meguro in Tokyo, on a very sunny day, and we got talking about how since the disaster there had been an explosion of unexpected cooperation and work partnerships all over Japan. And then we had the idea of connecting this with the artworks Mr. Tanaka had been making where people somehow work together to do a task, and so we arrived at our proposal.

KT ▶ In 2010, I made a video piece ([a haircut by 9 hairdressers at once \(second attempt\)](#), 2010) documenting the collaboration between nine hairdressers cut-

Selection committee (titles as of 2010): Taro Igarashi (Professor, Tohoku University, Sendai), Eriko Osaka (Director, Yokohama Museum of Art), Michiko Kasahara (Chief Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography), Shinji Kohmoto (Curatorial Advisor, The National Museum of Modern Art, Kyoto), Junichi Shiota (Chief Curator, Aomori Museum of Art), Kunio Motoe (Professor, Tama Art University, Tokyo)

Proposal by Koki Tanaka & Mika Kuraya for the competition for the Japan Pavilion at the 54th International Art Exhibition, La Biennale di Venezia (in Japanese only)

www.kktnk.com/text/p04.html

The Japan Pavilion at the 54th International Art Exhibition, La Biennale di Venezia

Title: *TABAIMO: teleco-soup*

Artist: **Tabaimo** (b. 1975 in Japan)

Commissioner: The Japan Foundation

Curator: Yuka Uematsu (Curator, The National Museum of Art, Osaka)

Venue: The Japan Pavilion, Giardini di Castello

www.jpfi.go.jp/veneziana-biennale

a haircut by 9 hairdressers at once (second attempt)

2010 HD video 28 min.

Commissioned by Yerba Buena Center for the Arts, San Francisco

Director of photography: Daniel Gorrell

Lighting and camera operator: Andrew Eckmann

Sound: Anthony Ranville

Gaffer: Daron Melkonian

Assistant: Alfredo Solis

Production photography: Tomo Saito

Sound sweetening: Taku Unami

Coordination: Julio Morales, Kim Silva

Production: Yerba Buena Center for the Arts

Curator: Julio Cesar Morales

Location: Zindagi Salon, San Francisco

Participants (August 1, 2010): Victor A Camarillo, Kristie Hansen, Nicole Korth, Nikki Mirsaeid, Olga Mybovalova, Sondra Osorio, Anthony Pullen, Brian Vu, Erik Webb, Karen Yee

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_05.html

vimeo.com/kktnk/haircut

how we arrived at the earthquake

Competition for the Japan Pavilion at Venice Biennale 2013 (competition held in 2012)

Participants (titles as of 2012) and submissions:

- Santo Oshima (former Curator, Suntory Museum, Osaka): Tadashi Kawamata
- Keiko Okamura (Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography): Takashi Ishida "Hanpuku suru heya Owaranai kaiga [The replicating room, the endless painting]"

- Mami Kataoka (Chief Curator, Mori Art Museum, Tokyo): Hiroshi Sugimoto "Puraton no dōkutsu [Plato's cave]"

- Yukie Kamiya (Chief Curator, Hiroshima City Museum of Contemporary Art): Yoko Ono "At Dawn"

- Mika Kuraya (Chief Curator, The National Museum of Modern Art, Tokyo): Koki Tanaka

- Sumi Hayashi (Curator, Kawamura Memorial Museum of Art, Sakura, Chiba): On Kawara (not yet approved by artist)

Selection committee (titles as of 2012): Taro Igarashi (Professor, Graduate School of Tohoku University, Sendai), Michiko Kasahara (Chief Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography), Shinji Kohmoto (Curatorial Advisor, The National Museum of Modern Art, Kyoto), Junichi Shiota (Director, Niigata City Art Museum), Tsutomu Mizusawa (Director, The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama), Hiroshi Minamishima (Professor, Joshibi University of Art and Design, Tokyo)

Tweets about the Japan Pavilion at Venice Biennale 2013 (in Japanese only)

Compiled by user "edtion1" togetter.com/li/303380

Symposium by ART iT + CNAC LAB: Koki Tanaka's book launch talk with Atsushi Sasaki for Koki Tanaka *Shitsumon suru sono 1 (2009–2013)*



ting one model's hair. I heard about how since the earthquake, lots of so-called "disaster utopia"-like temporal communities had emerged where people were helping each other out, and I wondered if I could somehow connect this to my recent practice. While we talked about this, we also came up with the idea of having several architects discuss the overall installation. Rather than it be me who does the thinking, the participants (architects) would think of things like how the project materials are arranged. Part of the proposal was that the arrangement in the space would use a few materials that are associated with evacuation shelters, such as aluminum sheets, blankets, wood, and cardboard, and the way the space is arranged would also be decided collaboratively.

MK ▶ The works that Mr. Tanaka had shot up till then include the video where nine hairdressers work together, talking and arguing as they cut one girl's hair, and another one that he completed after the earthquake, where five pianists compose music together on a single piano ([a piano played by 5 pianists at once \(first attempt\)](#), 2012). We had these two as references for [the competition](#), but what we proposed was not to show them but to have a group of people do tasks more related to the disaster, and to make a lot of videos from these, roughly ten or twenty of them. At first, we thought we'd show lots of short clips in quick succession. The biennale has a crowded and bustling atmosphere, and the full exhibition is very large-scale, so we didn't think people would actually take the time to watch one-hour videos. But we found it interesting that even though these two works are not directly related to the disaster, after experiencing the cooperation and collaboration that took place in the aftermath, you can't help but interpret them in that light. So we started thinking that we should include the piano and haircut videos too. We thought that, rather than showing many short and eye-catching video clips, it would be better to try to exhibit works in the biennale in such a way that reveals a long and careful process.

Wednesday, July 17, 2013 7:00–9:00PM
CNAC LAB (5-4-30 Minamiaoyama, Minato-ku, Tokyo)
www.cnac.jp/lab/symposium/detail.php?entry_id=0000000056

The Japan Pavilion at the 13th International Architecture Exhibition, La Biennale di Venezia

Title: *Architecture. Possible here? Home-for-All*
Architects/artists: Sou Fujimoto (architect), Naoya Hatakeyama (photographer), Akihisa Hirata (architect), Kumiko Inui (architect)
Commissioner: Toyo Ito (architect)
Organized by: The Japan Foundation
Venue: The Japan Pavilion, Giardini di Castello
Award: Golden Lion for National Participation
www.jpff.go.jp/venezia-biennale

a piano played by 5 pianists at once (first attempt)

a piano played by 5 pianists at once (first attempt)

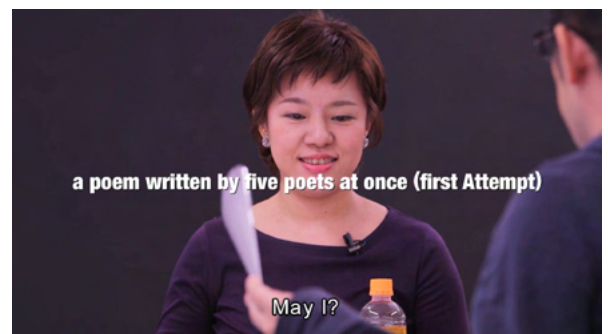
2012 HD video, two pencil drawings 57 min.
Commissioned by University Art Galleries, UC Irvine, Clare Trevor School of the Arts
Assistant director: Bryan Jackson
2nd AD/camera operator: JoAnn Hockersmith
DP/camera operator: Josh Secher
Camera operator: Maria Guerrero
Camera operator: David Luong
Gaffer/camera operator: Astrid Lugar
DIT: Patty Lin
Best girl electric: Olivia Yu
Key grip: Shaun Su
Best boy grip: Juan Luis Ulloa
Sound mixer: Michelle Teves
Sound mixer/boom: Yvonne Pon
Editing: Koki Tanaka
Sound sweetening: Taku Unami
Gallery director: Juli Carson
Associate director: Robert Plogman
Special thanks to Kei Akagi, Bruce Yonemoto
Participants (October 28, 2011): Adrian Foy, Kelly Moran, Devin Norris, Ben Papendrea, Desmond Sheehan
2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_04.html
vimeo.com/kktnk/piano

a poem written by 5 poets at once (first attempt)

a poem written by 5 poets at once (first attempt)

2012 HD video 68 min. 30 sec.
Commissioned by The Japan Foundation
Directors of photography: Keiichi Negishi, Hikaru Fujii
Sound: Yui Kimijima
Editing: Koki Tanaka
Color correction: Kenichi Negishi
Post audio editing: Yui Kimijima
Camera assistants: Kousuke Haruki, Ryutaro Takei, Shinya Aoyama
Recording assistant: Masato Watanabe
Coordinators: Tae Mori, Yoko Oyamada
Project assistants: Hideki Aoyama, Takashi Fujikawa
Still photography: Takashi Fujikawa
Location: The Japan Foundation, Tokyo
Equipment support: ARTISTS' GUILD
English translation: Dean Shimauchi
English subtitles: Kazuhiro Sakaguchi (STANCE COMPANY)
Participants (Oct. 15, 2012): Mari Kashiwagi (b. 1970), Misumi Mizuki (b. 1981), Rin Saito (b. 1969), Keijiro Suga (b. 1958), Jo Tachibana (b. 1984)
2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_03.html
vimeo.com/66631353

a pottery produced by 5 potters at once (silent attempt)



a pottery produced by 5 potters at once (silent attempt)

2013 HD video, potteries 75 min.

Commissioned by The Japan Foundation

Created with Vitamin Creative Space

Project coordinator: Lu Jia

Consultant: Hu Fang, Zhang Wei

Production supervisor: Xie Nina

Director of photography: Su Yuming, Su Yi

Sound: Cao Lingfeng

Project assistant: He Li

Associate director of photography: Xiao Haoyi

Editing, color correction: Koki Tanaka

Post audio editing: Yui Kimijima

Camera assistant: Ma Yang, Zhang Zhe

Sound assistant: Wang Bin

Editing assistant: Wang Yue, Li Yueming, Fan Xueni

English translation: Yao Songqiao

Chinese transcriber: Rui Zhe Transcription Studio, Beijing

English subtitles: Zhu Xiaowen

Special thanks to: Chen Qifeng, He Cong, Hu Mingkun (Kun Ge), Lin Ziyu, Liu

Qingyuan, Luo Baoquan, Luisa Treasca, Wang Guangyu, Wang Qi, Wei Hua,

Xu Qihai (A Hai), Yin Lin, Bruce Yonemoto

Participants (March 22, 2013): Wang Feng, Yuan Liang, Han Qing, Duan Ran,

Tan Hongyu

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_06.html

vimeo.com/66631353

documenting collaboration

A documentary of the Japan Pavilion at the Venice Biennale 2013

2013 34 min. 11 sec.

Director: Hikaru Fujii

vimeo.com/78105394

Hikaru Fujii 藤井光

Born 1976 in Tokyo, Japan. Artist and filmmaker.

hikarufujii.com silentlinkage.com

a behavioral statement (or an unconscious protest)

2013 HD video 8 min.

Commissioned by The Japan Foundation

Directors of photography: Keiichi Negishi, Hikaru Fujii

Sound: Masato Watanabe, Kyohei Tsuchiya

Editing: Koki Tanaka

Color correction: Kenichi Negishi

Post audio editing: Yui Kimijima

Camera assistants: Kousuke Haruki, Kana Yoshida, Michiko Tsuda

Coordinators: Tae Mori, Yoko Oyamada, Miwa Kaneko, Mihoko Kobayashi, Reiko Nariyama

Project assistants: Hideki Aoyama, Takashi Fujikawa

Still photography: Takashi Fujikawa

Location: The Japan Foundation, Tokyo

Filmed with the cooperation of the Korean Cultural Center, Korean Embassy in Japan

Equipment support: ARTISTS' GUILD

Participants (Oct. 5, 2012): Naohisa Abe, Ning Ding, Satomi Eguchi, Yoko Fujita, Misako Futsuki, Mihoko Himeda, Rika Hirano, Mayu Honda, Teruyuki Hoshina, Nobuaki Iizawa, Yuka Imai, Masanobu Ito, Yuri Izumi, Miwa Kaneko, Yuta Kaneko, Yo Katsurayama, Mihoko Kobayashi, Tetsuya Koide, Junko Kurata, Kazunori Matsunaga, Shota Miyake, Fusako Miyamori, Kaoru Miyamoto, Juri Murakami, Yukiko Murooka, Haruka Nakajima, Tomoko Nakamura, Reiko Nariyama, Yuka Niwayama, Akihiko Noda, Kousuk Noguchi, Ayako Ochi, Tsuyako Ogushi, Makoto Ohnishi, Yuko Oku, Yukio Oshida, Kanae Rachi, Noriko Sato, Masaya Shimoyama, Rie Shoji, Keiji Shono, Masayuki Suzuki, Yuko Tachibana, Makie Tahara, Masanori Takaguchi, Mana Takatori, Hidekazu Takeda, Yasuhiro Takehara, Aya Tamura, Shin-ichi Tanaka, Maki Toshimori, Norihisa Tsukamoto, Hiroaki Uesugi, Yuuki Yamaguchi

2013.veneziabiennale-japanpavilion.jp/projects/project_01.html

vimeo.com/63143361

the Venice Biennale in 2013

MK ▶ Our Special Mention is actually deeply connected to how the end roll for [the documentary](#) by [Hikaru Fujii](#) that we just watched has so many names, and how Fujii sandwiches shots of people working into the more glamorous scenes. We didn't get our prize simply because of how good or bad the work was. [The award jury](#) was very young, mostly in their late thirties or around forty years old, and there were clear criteria for why they awarded prizes. The Venice Biennale website explains the jury's criteria like this: "The Jury paid particular attention to countries that managed to provide original insight into expanded practice within their region. The collaborative nature of each of the chosen Pavilions was a palpable experience." In other words, working collaboratively was a major factor in the overall judging of the awards. The reason for [the Japan Pavilion's award](#) was described as being "for the poignant reflection on issues of collaboration and failure." Here, the jury clearly states that what's very important today is not simply whether the work is good or bad but rather the idea of collaboration, and that they wanted to spotlight a pavilion that shared their awareness of this issue.

I think the jury gave us the Special Mention because of how closely the Japan Pavilion fits with this theme of collaboration, and this made me very happy. Our question, shared with young artists around the world, was whether we are really ready to keep on building our society together, in spite of it being a pain to speak with others and argue about things in the process. And rather than simply spending vast amounts of money on a snazzy presentation, our peers were presenting the idea quietly in a format where you wouldn't understand it unless you spent a long time thinking about it on your own. As it turned out, that consciousness was also shared with many other pavilions. I was very happy that the jury picked up this shared issue and put the spotlight on it, and allowed us to be a part of that.



the Venice Biennale in 2013

Venice Biennale 2013: Jury (titles as of June 2013)

Chair: Jessica Morgan (b. 1968 in Great Britain; Curator, Tate Modern)
Jury: Sofía Hernández Chong Cuy (b. 1975 in Mexico; Director, Museo Tamayo), Francesco Manacorda (b. 1974 in Italy; Artistic Director, Tate Liverpool), Bisi Silva (b. 1962 in Nigeria; Artistic Director, Centre for Contemporary Art, Lagos), Ali Subotnick (b. 1972 in the United States; Curator, Hammer Museum)

Venice Biennale 2013: Awards for artists in the International Exhibition // Palazzo Enciclopedico

Golden Lion for the best artist in the International Exhibition // *Palazzo Enciclopedico*: **Tino Sehgal** (b. 1976 in Great Britain; Central Pavilion, Giardini) / "...for the excellence and innovation that his practice has brought opening the field of artistic disciplines." (La Biennale di Venezia)

Silver Lion for a promising young artist in the International Exhibition // *Palazzo Enciclopedico*: Camille Henrot (b. 1978 in France; Corderie, Arsenale) / "...for contributing a new work that in a sensuous and dynamic manner is able to capture our times." (La Biennale di Venezia)

Special mentions for artists of the International Exhibition // *Palazzo Enciclopedico*: Sharon Hayes (b. 1970 in the USA; Corderie, Arsenale) / "...for making us re-think the importance of alterity and the complexity of the interplay between the personal and public." (La Biennale di Venezia)

Special mentions for artists of the International Exhibition // *Palazzo Enciclopedico*: Roberto Cuoghi (b. 1973 in Italy; Corderie, Arsenale) / "...for the significant and compelling contribution to the International Exhibition." (La Biennale di Venezia)

Venice Biennale 2013: Awards for National Participations

Golden Lion for Best National Participation: Angola (Edson Chagas, *Luanda, Encyclopedic City*) / "...for the curators and artist who together reflect on the irreconcilability and complexity of site." (La Biennale di Venezia)

Special mentions for National Participations: Cyprus and Lithuania (group exhibitions *Oo* and *oO*) / "...for an original curatorial format that brings together two countries in a singular experience." (La Biennale di Venezia)

Special mentions for National Participations: **Japan** (Koki Tanaka, *abstract speaking—sharing uncertainty and collective acts*) / "...for the poignant reflection on issues of collaboration and failure." (La Biennale di Venezia)

Venice Biennale 2013: Golden Lions for Lifetime Achievement

Maria Lassnig (b. 1919 in Kappel am Krappfeld, Austria)

Marisa Merz (b. in 1926 in Turin, Italy)

Venice Biennale 2013: Georgia

Title: *Kamikaze Loggia*

Artists: Bouillon Group (formed in 2008 in Georgia), Thea Djordjadze (b. 1971 in Georgia), Nikoloz Lutidze (b. 1984 in Georgia), Gela Patashuri (b. 1973 in Georgia) with Ei Arakawa (b. 1977 in Japan) and Sergei Tcherepnin (b. 1981 in the USA), Gio Sumbadze (b. 1976 in Georgia)

Commissioner: Marine Mizandari (b. 1963 in Georgia; First Deputy Minister, Ministry of Culture and Monument Protection of Georgia)

Curator: Joanna Warsza (b. 1976 in Poland)

Venue: Georgian Pavilion at Arsenale

www.georgian-pavilion.org

Venice Biennale 2013: Angola

Title: *Luanda, Encyclopedic City*

Artist: Edson Chagas (b. 1977 in Angola)

Commissioner: Angola Ministry of Culture

Curators: Beyond Entropy (Paula Nascimento [b. 1981 in Angola; Director, Beyond Entropy Africa], Stefano Rabolli Pansera [b. 1980 in Italy; Director, Beyond Entropy]), Jorge Gumbe (b. 1959 in Angola), Feliciano dos Santos (b. 1964 in Mozambique)

Venue: Palazzo Cini, San Vio, Dorsoduro 864

Award: Golden Lion for Best National Participation

www.beyondentropy.com

Venice Biennale 2013: Cyprus

Title: *Oo*

Artists: Jason Dodge (b. 1969 in the USA), Lia Haraki (b. 1975 in Cyprus), Maria Hassabi (b. 1973 in Cyprus), Phanos Kyriacou (b. 1977 in Cyprus), Myriam

KT ▶ Yes, the jury was on the young side, mostly from the generation between mine and Ms. Kuraya's. In the same way as the National Participation awards, awards were also given to participants in Massimiliano Gioni's international exhibition, *Il Palazzo Enciclopedico*, and **Tino Sehgal**, who is a year younger than myself, was awarded the **Golden Lion** for best artist. Both the recipients and jury were the same generation, and it felt rather cozy (though there was also a sense of back-scratching), and it seemed that this issue of collaboration was shared by everyone.

the necessity of abstract speaking

KT ▶ We don't have much time left, but let's take a question from the audience.

Question ▶ If you are going to do something at the Japan Pavilion, wouldn't it be better to make an appeal for Japanese philosophy? The true nature of things can only be understood when abstraction and concreteness are both present. It seems like there is a need for a clear keyword that has a strong impact.

KT ▶ We took the disaster as our starting point in deriving an abstraction, and I suppose you could call this a philosophy about the current Japanese situation, if you truly feel the need to connect everything to Japan. But of course the issue is not simply "Japan"; it's the question of how far you can get in terms of reaching another reality. That disaster is not the only issue. There were other disasters before that one, and you never know when they will happen. You could say the same thing about wars, too. Abstraction is useful in the process of turning the ideas nurtured in these worst possible conditions into words. These words speak to all people. Abstraction and concreteness are not a pair of opposing things. Abstraction arises when multiple examples of concreteness come together. By "the concrete," you could say that I mean



A Pottery Produced by Five Potters at Once (Silent Attempt)



▲ artwork credits on pp. 21–22

Lefkowitz (b. 1980 in France), Gabriel Lester (b. 1972 in the Netherlands), Morten Norbye Halvorsen (b. 1980 in Norway), Dexter Sinister (b. 1973 in Great Britain), Constantinos Taliotis (b. 1983 in Cyprus), Natalie Yiayi (b. 1980 in Cyprus)

Commissioner: Louli Michaelidou (Cultural Services, Cyprus Ministry of Education and Culture)

Deputy Commissioners: Angela Skordi (architect), Marika Ioannou

Curator: Raimundas Malašauskas (b. 1973 in Lithuania)

Venue: Palasport Arsenale, Calle San Biagio 2132, Castello

Award: Special mention for National Participation (with Lithuania)

www.oo-oo.bo

Venice Biennale 2013: Lithuania

Title: oO

Artists: Liudvikas Buklys (b. 1984 in Lithuania), Gintaras Didžiapetris (b. 1985 in Lithuania), Jason Dodge (b. 1969 in the USA), Lia Haraki (b. 1975 in Cyprus), Maria Hassabi (b. 1973 in Cyprus), Phanos Kyriacou (b. 1977 in Cyprus), Myriam Lefkowitz (b. 1980 in France), Gabriel Lester (b. 1972 in the Netherlands), Elena Narbutaitė (b. 1984 in Lithuania), Morten Norbye Halvorsen (b. 1980 in Norway), Algirdas Šeškus (b. 1945 in Lithuania), Dexter Sinister (b. 1973 in Great Britain), Constantinos Taliotis (b. 1983 in Cyprus), Kazys Varnelis (1917–2010; from Lithuania), Natalie Yiayi (b. 1980 in Cyprus), Vytautė Žilinskaitė (b. 1930 in Lithuania)

Commissioners: Aurimė Aleksandravičiūtė & Jonas Žakaitis (formerly of Tulips & Roses in Brussels)

Curator: Raimundas Malašauskas (b. 1973 in Lithuania)

Venue: Palasport Arsenale, Calle San Biagio 2132, Castello

Award: Special mention for National Participation (with Cyprus)

www.oo-oo.co

Venice Biennale 2013: Great Britain

Title: *English Magic*

Artist: Jeremy Deller (b. 1966 in Great Britain)

Commissioner: Andrea Rose (Director of Visual Arts, British Council)

Curator: Emma Gifford-Mead (Curator of Visual Arts, British Council)

Venue: British Pavilion at Giardini

venicebiennale.britishcouncil.org

Venice Biennale 2013: Germany

Title: *Deutscher Pavilion 2013*

Artists: Ai Weiwei (b. 1957 in China), Romuald Karmakar (b. 1965 in Germany), Santu Mofokeng (b. 1956 in South Africa), Dayanita Singh (b. 1961 in India)

Commissioner: German Federal Foreign Office in collaboration with the German Institute of Foreign Cultural Relations (ifa)

Curator: Susanne Gaensheimer (b. 1967 in Germany; Director, MMK Museum für Moderne Kunst Frankfurt am Main)

Venue: Pavilion of France, Giardini di Castello

www.deutscher-pavillon.org

Venice Biennale 2013: France

Title: *Ravel Ravel Unravel*

Artist: Anri Sala (b. 1974 in Albania)

Commissioner: Institut Français in co-production with Centre national des arts plastiques (CNAP) and in collaboration with the French Ministry of Culture and Communication and the French Ministry of Foreign Affairs

Curator: Christine Macel (b. 1969 in France; Chief Curator, Musée national d'art moderne Centre Pompidou)

Venue: Pavilion of Germany, Giardini di Castello

www.pavillonfrancais.com

Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015

Open Research Program 02 [Report] Koki Tanaka & Mika Kuraya "abstract speaking—participating in the Venice Biennale"

Date: Saturday, July 27, 2013 7:00–8:30PM

Venue: Doshisha University Imadegawa Campus (Ryoshinkan B1F Room 2), Kyoto

Presented by the Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee, Kyoto Association of Corporate Executives (Kyoto Keizai Douyukai), Kyoto Prefecture, and Kyoto City

Under the auspices of The Japan Foundation

Photography: Takahiro Mitsukawa, Ayaka Nishiura

Event assistants: Ren Hasuda, Misato Kawanishi, Hirotaka Komata, Shoko Oishi, Asuka Shimizu, Chinami Sumi, Ikue Yamamoto, Nanami Yasuda, Yoshiya Yoshimitsu, Jihye Yun

Special thanks to Toshiya Echizen

www.parasophia.jp/events/en/a/koki-tanaka-mika-kuraya

a clear opinion. Each of my projects are very clear and easy to understand when you see them individually. They don't have an emotional quality that requires careful perception on the viewer's part; they are straightforward and easy to understand. But what about when multiple clear opinions come together? When there are many differing opinions, you don't know which way to go with them and things become ambiguous. We feel at a loss. But that is actually the attitude of trying somehow to embrace multiple differing opinions. Inside the ambiguity there are many concrete and disjointed things coming together. We don't know what to do with them, but this is precisely why we are able to keep thinking about our social situation. This is the concept that I put into "abstraction." This abstraction, or the impossibility of forming a consensus, so to speak, can be understood by anyone no matter where they come from. This is because it is a problem that we are all facing right now, all over the world. I would rather retreat into the ambiguous, muddled backwaters and search for our words there than drown in spectacle.

MK ▶ For example, let's say that we showed photographs of the disaster zones or a documentary with people crying. In this case, how would it have been seen in a place like the Venice Biennale, which is very far away and where the people are giddy with all the art there? I think it would have just ended with them saying how hard and sad it must have been. This happens when you make something that's about how dire the situation in Japan is, or about Japan getting back on its feet. What we showed was an artwork expressed in a very roundabout way with things completely unrelated to the earthquake, such as making pottery or playing the piano. But every video shares the incredibly simple framework of "a group of people engaged in a single task and working through it together." This means that if we take out the parts where people are playing the piano or making pottery, then you could interpret the works as being about people asking how they should build their society after an earthquake. Or not even just earthquakes; it could be a country ravaged by war and you realize that you are the ones who have to work together to rebuild your society. And in this way we would be able to convey what Japan was experiencing now to the people visiting the Venice Biennale from all over the world as their own problem. This is surely the reason why Mr. Tanaka gave the exhibition the title "abstract speaking." It gets across because it's roundabout. Because it's roundabout, there are lots of loopholes and in these you can project your own ideas and experiences, and so you are able to understand these problems as your own, no matter how far away you might be.

For a time in Venice in the 1990s, there were lots of works that dealt with big universal themes like love and death that really tug at your heartstrings, the kind where you built a gigantic installation and really swept people off their feet. But at the 2013 Venice Biennale, the works are less flashy and more ambiguous, and you need to take your time to understand them. That there were so many works where you had to use your head and think, as opposed to ones which seek to impress quickly with spectacle, perhaps shows that people in the world today are wary of the latter. Artworks that you can understand right away and move you have their advantages, but not infrequently it happens that you get emotionally moved and pulled in one direction without knowing it. I think that there are many people who thought, like us, that this is an era when rather than being shocked in an instant, you have to spend time thinking carefully about more ambiguous things. And so this was the methodology we spent a year thinking up in order to share an awareness with people around the world in a way that did not create a spectacle of the situation, which is what would have happened if we had simply recounted what had happened in Japan or declared that Japan is going to recover.

PARASOPHIA CHRONICLE 02

Parasophia Chronicle 第1巻 第2号(通巻第2号)

発行日: 2014年6月30日

編集: 浅見旬、池澤茉莉 (PARASOPHIA事務局)、永田絵里 (PARASOPHIA事務局)

英文和訳: 永田絵里 *別記の場合を除く

和文英訳: 永田絵里、hanare × Social Kitchen Translation

発行: 京都国際現代芸術祭組織委員会

ISSN 2187-9451

フォトクレジット

表紙, p. 12 (左): 藤井光監督『第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ 国際美術展 日本館』2013年 (Vimeo動画からのスチル)

p. 1: 西浦綾佳 / 提供: PARASOPHIA事務局

pp. 2, 13, 14, 18: 光川貴浩 (合同会社バンクトゥ) / 提供: PARASOPHIA事務局

pp. 4, 7, 8, 10, 12 (右), 20-23: Vimeo動画からのスチル (各作品情報を参照)

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015

オープンリサーチプログラム02[報告会]

田中功起+葦屋美香「抽象的に話すこと——ヴェネツィア・ビエンナーレに参加して」

日時: 2013年7月27日(土) 19:00-20:30

会場: 同志社大学今出川キャンパス 良心館地下2番教室

主催: 京都国際現代芸術祭組織委員会、一般社団法人京都経済同友会、京都府、京都市

後援: 国際交流基金

www.parasophia.jp/events/a/koki-tanaka-mika-kuraya

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015

会期: 2015年3月7日-5月10日

会場: 京都市美術館、京都府京都文化博物館ほか府・市関連施設など

アーティストックディレクター: 河本信治 (元・京都国立近代美術館学芸課長)

www.parasophia.jp

Parasophia Chronicle: EPUB版

現在ご覧になっているのはPDF版です。電子書籍リーダーに適したEPUB版は下記のURLから無料でダウンロードできます。

www.parasophia.jp/publications

京都国際現代芸術祭組織委員会事務局 (PARASOPHIA事務局)

〒604-8152 京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町645 flow-ing KARASUMA 2階 | TEL 075-257-1453 | FAX 075-257-1454
info@parasophia.jp

© 2014 by the Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee. All rights reserved

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015とは

京都国際現代芸術祭は、京都国際現代芸術祭組織委員会、京都経済同友会、京都府、京都市が主催する現代美術の国際展です。豊かな文化遺産と自由な学術環境をもつ京都という街の力を結集し、魅力に満ちた芸術祭の実現を目指します。今回は「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015」として、2015年3月7日から5月10日まで京都市美術館、京都府京都文化博物館ほか京都府、京都市の関連施設等で開催する予定です。

オープンリサーチプログラムとは

2015年の開催に向けて、アーティストックディレクターとキュレトリアルチームは、いま注目すべき表現活動や、現代のアクチュアルな状況や問題について調査研究と情報収集を行っていきます。このプログラムでは、国内外のアーティストや研究者との対話、世界各地で開催される国際展のレポートなど様々な切り口を計画しています。そのリサーチのプロセスを広く一般に公開し、刺激的な対話の時間を参加者と共有することも、オープンリサーチプログラムの目的のひとつです。

Parasophia Chronicle [パラソフィア・クロニクル]とは

京都国際現代芸術祭事務局 (PARASOPHIA事務局) の編集による、オープンリサーチプログラムなどの調査記録の公開を主な目的とした不定期発行の電子書籍です。

PARASOPHIA CHRONICLE 02

Parasophia Chronicle vol. 1 no. 2 (iss. 2)

Published on: June 30, 2014

Edited by: Jun Asami, Mari Ikezawa (Parasophia Office), Ellie Nagata (Parasophia Office)

English-to-Japanese translation by: Ellie Nagata (unless otherwise noted)

Japanese-to-English translation by: hanare × Social Kitchen Translation, Ellie Nagata

Published by: Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee

ISSN 2187-9451

Photo credits

Cover, p. 12 (left): Still from Hikaru Fujii, dir., *A documentary of the Japan Pavilion at the Venice Biennale 2013*, 2013 (on Vimeo)

p. 1: Ayaka Nishiura, courtesy of Parasophia Office

pp. 2, 13, 14, 18: Takahiro Mitsukawa (bankto LLC), courtesy of Parasophia Office

pp. 4, 7, 8, 10, 12 (right), 20–23: stills from Vimeo video clips (see note for each work)

Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015 Open Research Program 02 [Report]

Koki Tanaka & Mika Kuraya “abstract speaking – participating in the Venice Biennale”

Date: Saturday, July 27, 2013 7:00–8:30 PM

Venue: Doshisha University Imadegawa Campus (Ryoshinkan B1F Room 2), Kyoto

Presented by: Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee, Kyoto Association of Corporate Executives (Kyoto Keizai Doyukai), Kyoto Prefecture, Kyoto City

Under the auspices of: The Japan Foundation

www.parasophia.jp/events/en/a/koki-tanaka-mika-kuraya

Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015

Dates: March 7–May 10, 2015

Venues: Kyoto Municipal Museum of Art, The Museum of Kyoto, and other locations in Kyoto

Artistic Director: Shinji Kohmoto (former Chief Curator, The National Museum of Modern Art, Kyoto)

www.parasophia.jp/en

Parasophia Chronicle: EPUB version

You are currently reading the PDF version of this publication. The EPUB version is available as a free download at the following address.

www.parasophia.jp/en/publications

Parasophia Office (Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee)

645 Tearaimizu-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-8152 JAPAN

Phone +81-75-257-1453 | FAX +81-75-257-1454

info@parasophia.jp

© 2014 by the Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee. All rights reserved

About Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015

The Kyoto International Festival of Contemporary Culture is an international exhibition of contemporary art presented by the Kyoto International Festival of Contemporary Culture Organizing Committee, the Kyoto Association of Corporate Executives, Kyoto Prefecture, and Kyoto City that brings together the rich cultural heritage and the vibrant academic environment of Kyoto. The first exhibition, *Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015*, is scheduled to be held from March 7 to May 10, 2015 at the Kyoto Municipal Museum of Art, the Museum of Kyoto, and other locations in Kyoto.

About the Open Research Program

In preparation towards the official program in 2015, the artistic director and the curatorial team will conduct research on artists and projects as well as situations and issues that are particularly relevant in the present day. A portion of this research will be conducted publicly through dialogues with artists and researchers from Japan and abroad, reports on international exhibitions held around the world, and other events in the form of the Open Research Program.

About the Parasophia Chronicle

The Parasophia Chronicle is a series of electronic publications edited by the Parasophia Office. Its main purpose is to present a public record of the office's research, such as lecture transcripts and other records of the Open Research Program.